洛友會報

京都大学工学部
電気系教室内
洛友会
京都市左京区吉田本町

迎春

1990年1月1日

洛友会役員

会長	松田長三郎
副会長	芦原義重
同	本多静雄
同	真田安夫
同	金井久兵衛
同	河本勝寿
同	上西亮二
同	吉岡俊男
同	大谷泰之
同	川端昭
同	越坂延雄
東京支部長	三浦武夫
関西支部長	大嶋幸一
中部支部長	大野彰
中国支部長	松谷健一郎
四国支部長	中川修一郎
九州支部長	上田保之
北陸支部長	野村精二
東北支部長	三上謹五
北海道支部長	池内義則
常任幹事	近藤文治
同	木嶋昭

創刊第一五〇号記念
新春特別号

新春を迎えて

洛友会副会長　大谷泰之

平成時代、そして21世紀に向っての90年代の幕明けの新春を迎えて、先ず新年のお慶びを申し上げます。とともに会員の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

最初に本会報は丁度創刊150号に当りますが、別稿の通り予想外に多数の本文と10数頁を超える貴重且つ興味ある玉稿を頂きましたので、創刊150号の記念号として発行することになりましたことを先ず申し上げますとともに、筆者も聊か長文を書かせて頂きましたが、読者の皆様には若い方も出来るだけお読み頂ければ幸です。

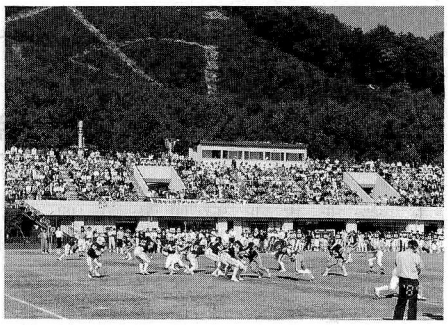
さて昨年はご承知の通り年頭に昭和から平成へと年号が変り、国内的国際的にも、政治、経済、産業、社会、教育その他各方面に於て、歴史的大変革大激動、その上記録的な異状気象や自然現象を含め全く予想を遥かに超えた大変革事件の多い年であった。しかし国内の経済産業界では一昨年来の好況に支えられて卒業生とくに理工系卒業生の求人就職状況は近年になく明るいようであるが、このいざなぎ以来の好況は我国の科学技術、特に基礎科学技術や先端技術の進展も大いに貢献していることは誠に心強い限りである。

茲で忘れてはならないことは、科学技術革新と人間性との調和問題や真に豊かな人間社会生活環境への影響問題であって、これからの科学技術は自然科学だけでなく広く人文、社会科学や文化をも含めた新しい科学技術を目標とするべきであり、これからの時代は或る意味ではアメニティ（快適環境）科学の追究の時代とも考えられる。筆者も大学停年の頃から、これからは総見直しの時代、それも先取りした見直しが必要であると話していたが、税制や政治の見直しだけでなく、各界共もう一度原点に戻って見直す必要があると思ふ。

茲で上記豊かさとは何かについで考えてみると、昨年11月10日発表の国民生活白書によると、豊かさは物から心へ物質的から精神的なものへと変りつつあること、又国民のゆとり感についての調査で

は年令別には30～40歳代が最も低く特に経済的、精神的、時間的なゆとり感が一番低いようである。最近のように我国では益々高令化社会へ移つているが定年後の元気なボランテイアの方も増加して、又若い者に負けず活躍している高令者も多い、云わばエイジレスの時代になつて来たとも云えるかも知れない。

話はがらりと変るが筆者も毎年何回か卒業生の卒業何周年かの記念クラス会に出席させて頂くことが多いが、去る11月11日京都上京区で開かれた昭和39年卒の卒業生25周年記念クラス会に招かれた。39名の参加者の中で留学生（シンガポール出身）のヘン・フーチョン君が（西独ボン在住で西独政府所属の東アジア研究所の主任研究員）このクラス会に出席のため、その前日に来日し出席した。そして同君から最近の東側諸国ソ連や特に東独の政治社会諸状勢の歴史的なしかも加速的な大変革に共う事件、東西ドイツの交流開始の象徴としてベリルンの東西間の壁があつけなく崩れ落されるという歴史的事件について等生々しい話を聞くことができた。これにつけてもこの様な世界的秩序の歴史的転換期を迎え、これに即応できる柔軟性が我国にも求められているのではなかろうかと思われる。



話は又変るが前記のクラス会に出席した川野家稔君の長男が現在京大電気系学科の一回生に在学、しかも京大アメリカンフットボールチームの一員になっていると聞いた。京大アメフトチームは昭和61年末アメフ関西リーグ戦に優勝し更に翌62年正月社会人チームに勝ち日本一になった（このニュースは本会報62年1月号にも書いておいた。）

次に去る11月3日洛北宝池の球技場でアメフの対同大戦が行われ、筆者は観戦に行かれる母教室西川祷一教授夫妻（筆者と同じ町内在住）から試合直前に聞いて急いで観戦にかけつけ、京大側のスタンドの応援団の中に交って応援したが、京大は惜しくも少差で負けた。勿論スタンドの上の高き櫓の上から見下すカメラからのクローズアップの多いテレビ中継画面のように試合経過の詳細はスタンドの下段に腰を下していた筆者には余り判らなかつたが、京大側観客と一体になった応援団諸君の熱気に触れて本年76歳の筆者もすつかり昂奮若返ったような気分を味つた次第であった。なお掲載のスナップ写真はこの試合のスタンド風景で一枚は京大側から見た相手側スタンドで背景にはお盆の五山の送り火の一つ松ケ崎山の妙法の妙の字の一部が見られる、又他の一枚は京大側スタンドでテレビの櫓が見える。

次に同じ11月3日は文化の日であった。この文化とは何かを考えてみると仲々難しいが、現代は第三の文化時代とも云われ、明治維新の文明開花の文化から戦後の文化的建設そして現在の経済優先から文化優先の時代へと移りつつあるとも云える。最近の東京都の調査によると、「文化という言葉から連想する文化的生活のイメージは美しく、楽しい豊かな生活の中で、歴史と伝統を大切にし乍ら学問教育教養を身につけること」となっている。更に総理府調査によると、今後更に鑑賞したい文化は映画、演芸、芸術の順になっている。又英国の歴史学者アーノルド・トインビーは「文化は動きであり状態ではない航海であって港ではない」と云っている。筆者は近年趣味の一つとして美術主として洋画の鑑賞と、時々アクリル絵具の静物や風景それも欧洲の国々の思出の風景画を書いてはいるものの仲々皆さんに見て頂く様な本格的なものにはならない。最近鑑賞より創造への転換そして人生をパーフォーマンスとして楽しむことが大切であるとも云われていても、筆者には仲々及びもつかぬ話である。それでも近府県各地の美術館巡りや街の中の隅々まで歩いてそこの文化や伝統に接することも健康法の一つと考えて出来るだけ歩くことに努めている。

以上聊か話が長くなり過ぎて申し訳けない次第であるが、これから洛友会本部としての、ご報告に移ることにしたい。

先ず会長松田長三郎先生は去る11月28日満96歳の誕生日を迎えられましたが、その後もお元気に、何のご病気もなく自宅でご静養を続けておられます。去る9月末頃筆者も藤村俊一君（講昭11年卒近畿地方発明センター事務局長）と一緒に先生の自宅へお伺いした時もお元気なお姿に接した次第であった。更に最近藤村君が諸報告のため先生をお訪ねした時の話では、後述の清野武名誉教授（昭12卒、昭53年情報工学教室教授を停年退官以前から始められ退官後から本格的に草木花等の墨彩画の道に入られ、現在迄に20数回全国、時には国外の展覧会にも作品を出品）最近11月14日から一週間京都イノダギアラリーで開かれた第11回作品展には松田先生も出かけられ、先生も大学在官時代から同じく書画を楽しんでおられる関係から、大変感嘆しておられたとのことであった。何れにしても先生には、これからも益々お元気に過されるよう心からお祈している次第であります。

次に昨年11月末に発行された洛友会名簿（平成二年三年用）は既にご活用頂いていることと思っているが、洛友会の隔年毎発行の名簿が益々整備充実されて他に例の少ない行届いた名簿に成長したことは本会の大きい誇りであり、この機会に改めて本部の常任幹事の近藤文治先生及び今は亡き竹村清氏と、広告募集その他にご支援ご協力を頂いた各支部役員その他関係の皆様のご努力に対して深謝申し上げる次第である。

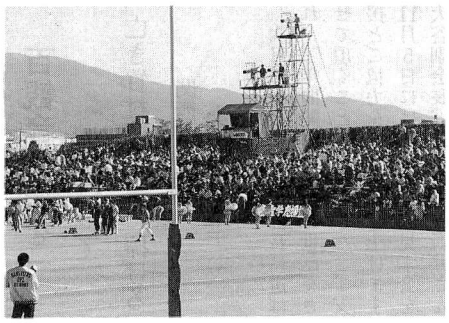
茲に誠に残念なお知らせを申し上げなければならないのは、従来名簿や会報発行その他洛友会本部の事務の中心として綿密なご努力を傾注して頂いていた竹村清常任幹事（講昭13卒応用科学研究所事務局長）が前会報の編集後記にも

ある通り、去る8月25日突然母教北側玄関前で心筋硬塞で倒れられ意識不明のまゝ入院、以来約2ケ月半有余特別室で加療中の処、夫人はじめ皆さんの看護の甲斐もなく去る11月10日夕永眠され不帰の客となられましたことをお知らせするとともに、茲に謹んでご冥福をお祈りする次第であります。

そして名簿発行について広告募集や編集事務に関して事務引継も出来ないまゝピンチヒッターとして山口春男君（昭20卒、竹村常任幹事の前任常任幹事）に急遽代理として再度出馬して頂くと共に、更に神戸俊夫君（講昭14卒、本部幹事）にも協力して頂いて漸く曲りなりにも11月末発行にこぎつけたわけであった。この様な予期せぬ緊急事態が発生した関係で色々不備な点もあり又ご迷惑をお掛けしたことも考えられるが何卒ご容赦下さるようお願い申し上げると共にこの機会に改めて山口君には色々ご都合もある処を、又神戸君には経営者としての多忙な中を何れも曲げてご協力頂いたことを深謝致します。

尚本会報一月号の発行も山口君に無理にお願いした関係もあり時間不足などの点で皆様にご迷惑をおかけしたかも判らないがこれ又何卒お許し下さるようお願い申し上げます。本会報の原稿集めについては筆者も及ばず乍らお伝手いして、別稿清野武、田中哲郎両名誉教授の趣味や体験に関しての貴重な記事を、何れもご多用の処を無理に書いて頂いた。又森芳郎氏（講大14卒）にも昭和の10年卒頃迄の会員にご関心の深い故青柳名誉教授や関野弥三先生にまつわる思い出話を藤村俊一君のお世話で書いて頂いた。

更に川端副会長（昭28卒）には先般完成した教室改築に関して、最近発行された京大工学部報（部内関係者のみに配布）に、電気系教室の建物の増改築状況の歴史的変遷に関し明治の創設時代から最近に到る迄の長年月に亘る経過を図面入りで詳細な報告を発表しておられるので川端先生の了解を得て全文を転載させて頂いた。その



他教室関係の諸報告原稿も引続き寄せて貰った。更に山口常任幹事代理からも別に各支部長を通じ特にご投稿をお願い申し上げていた処、予想外のご協力を頂き別稿の通り、中部支部におられる本多静雄副会長さん（大13卒）から本年93歳というご高令にも拘らず曲げて貴重な原稿を頂いたのを始め全国六支部長や関西支部の家族旅行会（去る11月5日神戸港から外洋巡航船による明石海峡等のクルージングとグルメのパーティー等の催し及び帰港後神戸海洋博物館の見学等）の報告も大島支部長と松井幹事さんから寄せて頂いたので、改めてこれらの方に厚くお礼申し上げます。

本稿の始めにも述べた通り前述の如く予想外に多数の玉稿を頂いたこともあり本号は又創刊150号記念号として全部掲載させて頂いたので、総頁数も10数頁を超える部厚いものになったがそれだけ郵税や印刷費も増加し、本年度会計も若干繰越額が減少することも予想されるがこれも止むを得ないことと思っている。

最後に皆様のご関心も深い京都の地下鉄事情について少し許りお知らせすると、洛北地区では去る10月5日京阪電鉄の三条京阪と出町柳間の鴨東線が開通した。これは京阪電鉄会長角田寛君（昭18卒）の多年のご努力によるものであって、大阪方面から直接出町柳迄開通し今出川通りから京大百万遍への便を受けている方も多く、同時に洛北・八瀬・大原・岩倉方面への交通も可成り便利になった。地下鉄と云えば既設の烏丸線も来年には植物園の北側迄延長され、又懸案の東西線（JR二条駅より御池通を東進京阪三条駅より京津線に乗入れ醍醐迄10キロ余り）と平成六年完成を目標に先般着工される等他都市に近づきつゝある情況となった。

終りに会員の皆様の益々のご健勝とご発展をお祈りすると共に今後共本部支部役員各位のご支援ご鞭韃をお願い申し上げて、創刊150号記念号の巻頭言を終ります。

（平成元年11月18日記）

年頭所感

東京支部長に就任して

東京支部長　三浦武雄

洛友会の皆様、新年あけましておめでとうございます。

本会も年々隆昌をきわめておりますが、これも歴代の会長をはじめ、役員の方々並びに事務局の方々の多大なご尽力の賜物と深く敬意を表します。

私自身も昨年6月にはからずも皆様のご推挙により東京支部長の任を賜り、改めて責務の重さを身に感じております。微力ながら任期を全うする所存ですので、何卒皆様のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。

さて、いよいよ今世紀最後の10年であります1990年代がスタートしましたが、昨今の世の中を見わたしますと、皆様もご高承の通り、ソ連のペレストロイカ、東欧の民主化、EC統合化、日米経済摩擦問題の深刻化など特に国際的な政治・経済面において新しい秩序に向けての動きが見受けられます。わが国においても、経済面では内需の拡大もあって景気拡大基調が持続しておりますが、価値観等、大きく変化しつつあるものもあります。理工系学生の製造業離れというのもその一つの現われではないかと思われます。

私は、現在コンピュータを中心とする情報産業関連の仕事に携わっておりますが、この業界も高度情報化社会といわれる新しい時代を支える産業として日進月歩の技術革新を背景に内外で厳しい動き

を見せております。

このように世界は、各分野において活発に変化していますが、世の中にはいつの時代にも変わらないものがあります。人と人との絆の大切さもその一つではないかと思います。人は、いろいろな口実を設けてお互いに集います。仕事の面での集まりもたくさんあるでしょう。しかし、日頃の仕事を離れての古き京都での学生時代も語れる洛友会は大いに意義深いものであると考えています。

洛友会東京支部も毎年全体的な集まりのほか、見聞を広める旅行会や見学会、さらには趣味の会、各卒業年次グループ毎の会合等々多面的な活動が行われています。私も旅行会には積極的に参加し、10月下旬鹿島・銚子の方にバス旅行に行って参りました。

今後とも、洛友会もこうした伝統的な行事を尊重しつつ、環境の変化に対応して積極的に新しい活動を採り入れていかなければならないと思います。

末筆ながら洛友会の更なる発展と本年が会員の皆様並びにご家族にとってご健勝で幸多き年となりますことを祈念致します。

百観音霊場を巡拝して

亡き竹村 清先輩に捧げる

関西支部長
大嶋 幸一

六月の総会で関西支部長に選ばれ、二年間関西支部のお世話をさせて頂くこととなりました。ご支援とご協力をお願い申し上げます。11月5日には恒例の家族見学会を大谷副会長、長老米寿の新井さん始め百四十名のご参加を得て、秋晴れの明石海峡を周遊しグルメに舌鼓を打ち福引きに興じ、秋の一日を楽しんで頂きました。

本年は洛友会会員名簿発行の年に当りますが、発刊を目前に控えて今日迄永年事務局の仕事を一手に引受けて来られた竹村 清先輩（講、昭13）が8月末突然病に倒れられ、薬石効なく11月帰幽されました。全く青天の霹靂です。心よりご冥福をお祈り致す次第です。

何分、名簿と共に洛友会会報新年号の発行が差し迫っていることでもあり、急遽応援して下さった地元世話役山口さんから寄稿のおはなしがありましたので竹村先輩の永年のご苦労にさゝやか乍らもお報いする気持で、過日巡拝を終えた「百観音霊場」について取纒め寄稿させて頂くこととしました。兎角、今の世の風潮が物質文明偏向の〝モノ〟から〝心〟に移りつつある時、日常の多忙な世界を離れて古刹を尋ねて心静かに仏像に対し古之の名僧の御教えに耳を傾ける、心の支えとして何らかのお役に立てば幸いです。

観音さま、何とも庶民に親しみ深い仏さまではないでしょうか。この観音さまをおまつりする霊場は全国に数多くありますが著名なのはこゝに記す百観音霊場でしょう。

〈西国三十三ヵ所観音〉――那智山青岸渡寺を振出しに谷汲山華厳寺を満願寺とする近畿地方に散在する三十三観音霊場。紀三井寺、長谷寺、醍醐寺、三井寺、清水寺、中山寺等、著名寺院が多い。

〈坂東三十三ヵ所〉――関東平野一都六県に拡がる三十三観音霊場。振出しは杉本寺（十一面、鎌倉）、満願寺は那古寺（千手、館山）。十三番、浅草寺（東京）、十八番中禅寺（日光）はご存知の名刹。

〈秩父三十四ヵ所〉――秩父市内とその近在の三十四観音。西国二、一〇〇粁、坂東一、三〇〇粁と違い全行程九十粁余りに集中している。

この合せて百観音霊場が歴史も古く、人口に膾炙している。この外、小型の巡拝霊場として、例えば洛西観音霊場（京都）・播磨西国（兵庫）・近江西国（滋賀）・伊香西国（滋賀、湖北）・淡路西国・摂津西国・河内西国等があり、昭和7年には「新西国三十三カ所観音霊場」も生まれた。

さて、これらの観音霊場は元来山嶽修験者や真言、天台などの高僧が誓願の成就、霊験と恩寵の祈願、贖罪などを信仰の目的として夫々の地方に散在する寺院を遍歴したことから初まったもので、礼所の「三十三」という数は観世音菩薩が三十三の姿に化身して人々を苦しみや悩みから済度するという観音経で説く「三十三身普門示現」から起つたもの、又信仰のご本体の観音世菩薩に十一面や千手観音が多いのは世の音を観てそれ相応の救いを行うには十一面、千の手、千の眼が必要なことから、と云われる。

霊場が開創されたのは約一、三〇〇年前の養老二年（七一八）西国三十三ヵ所が、引続き鎌倉中期に坂東三十三ヵ所、文歴元年（一二三四）に秩父三十三ヵ所（のち三十四ヵ所）が開かれてからで、その后もその時々の政争や政権の移り変りと関係なく、又途絶えることなく巡拝が続けられている。

霊場の多くはいにしえは人跡きわまる険しい岩山や人里離れた僻地にあり、手に金剛杖をもち、手甲、脚絆に草鞋をはき、白小袖の上に笈摺を背に菅笠を頭に、道もよくないと云うよりも全く道もない険しいけもの道を、野に伏し山に寝、雨に打たれ乍ら、西国二、一〇〇粁、坂東一、三〇〇粁、秩父九〇粁の道のりを延々と巡拝したのでありましょう。当時の人が現代の私達に比べ比較にならぬ程の体力、脚力があったにしても大変な難行で、今の世界一周以上の大仕事であったと推察されるが、それにもまして険しい奥山の頂きに豪壮な堂塔伽藍を築き、国宝級のあまたの仏像をまつる、而もそれが時の権力者の手でなく庶民の手でつくられたこと、信仰の力というか人間の生への限りなき祈りというのか、全く敬服の外ない。

今日では交通も発達し鉄路、バス、車が利用出来るが、巡拝の精神から云って鉄路、バス程度の利用に留め、古人の足跡を徒歩にて巡拝し、静かに霊場の雰囲気に浸たるのが望ましい姿であらう。天の橋立の成相山成相寺（西国二十八番）や姫路書写山円教寺（西・二十七）の如くケーブルカーやロープウェイがあって山頂でも容易に巡拝出来るし、今熊野観音寺（西・十五）舞台で名高い清水寺（西・十六）六波羅密寺（西・十

七）六角堂（西・十八）華堂（西・十九）西山善峰寺（西・二十）は京都市中央部や近在にあるし、浅草観音の浅草寺（坂東十三番）も東京都内にあって年間三千万人を超す善男善女で賑わう札所である。併し、西国最大の難所寺と云われる桜の名所醍醐寺（西・十一）の上り下り六粁「胸突き八丁」の急坂、泉大津槇尾山施福寺（西・四）の九町千段に及ぶ峻しい石段、五十米毎に諺を書き入れた三十の道標のある安土の観音正寺（西・三十二）難所寺のひとつ御嶽山清水寺（西・二十五、兵庫）又「八溝知らずの偽坂東」と云われる坂東一の難所八溝山（東・二十一）などの長く峻しい急坂は大変な鍛練の場となった。上りの苦しさもさること乍ら、下る時には膝が笑う現象を起こし、今更乍ら平素の鍛練不足を嘆く羽目になった。

それにしても三十三ヵ所に伝わる伝説の豊かさ、夫々の寺院には深い由緒や神秘的な伝説があり、これを尋ねて歩くのも興味深い。観音めぐりの開祖といわれる長谷寺徳道上人が冥土で閻魔大王から三十三の宝印を授けられて蘇生し、観音霊場巡拝を実行に移し大王との約束を果したという言い伝えに始まる。若き空海が二十歳の時剃髪と得度をしたという西・四番施福寺。六番壺坂寺は人形浄瑠璃「花の山壺坂霊験記」で夙に名高い。長谷寺（西・八）はボタン、ツツジ、春の桜の名所で花の寺とも云われる。醍醐寺（西・十一）には開創以来千百有余年尽きることのない霊水が湧出し醍醐味の語源となっている。桜の名所紀三井寺（西・二）の為光上人の竜宮城での如何にも南紀の札所らしい楽しい伝説、京都善峰寺（西・二十）で源尊上人が数百の猪の力を借りて開山した話。茨木総持寺（西、二十二）の開祖山蔭中納言（庖丁の元祖）の大亀にまつわる数奇な伝説、華堂（西、十九）の子守娘おふみの哀れな物語、六波羅密寺（西・十七）空地上人の悪疫平癒のご利益。安産符子育ての中山寺（西・二十四）、日本三景の一つ天橋立の対岸にそゝり立つ成相山成相寺（西・二十八）の餓えた僧の縁起と〝撞かずの鐘〟の赤ん坊の悲話、琵琶湖に浮ぶ神秘の島、竹生島の天狗と行基上人にまつわる友情ばなしの宝厳寺（西・三十）満願寺谷汲山華厳寺（西・三十三）には満願寺らしく青銅の「精進おとしの鯉」や内陣床下に「戒壇めぐり」がある。等々神秘的な奇蹟や物語が誠に庶民的で興味深い。紫式部が琵琶湖畔石山寺（西・十三）で折からさし昇る八月十五夜の明月が湖上のさざなみに砕ける様を見て「月のいと華かにさし出てたるに今宵は十五夜なりけりと思し出でて云々」と源氏物語、〝須磨の巻〟を書き起したという石山伝説も優艶な王朝物語にふさわしい言い伝えである。

どの寺院にも巡拝した人が心を籠めて写経した般若心経や願いごと、病気快癒のお札が柱や壁はもとより天井にも所狭きまで貼りつけられている、どれもが人間の生きることへの執着と健康への願いである。今尚私の脳裡を離れないのは岩間寺（西・十二、石山）で見た一女性の御礼の掲額である。娘と並んで撮った一枚の写真と共に美濃紙に認められた大病平癒の額には、その婦人が子宮癌と宣告され一時は死を覚悟したが、信仰篤い娘に伴われて岩間寺に参籠しご本尊に祈願しているうち、旬日ならずして病根が下り物として流れ出て快癒、三十年后も今尚元気にお参り続けておられる、という世にも不思議な此の現代にもあるのかと疑う奇蹟が綿々と綴られていたことである。このご本尊の千手観音は夜毎衆生済度に駆け続けられ朝には全身汗びつしょりなられていると云うので「汗かき観音」と呼ばれているのが、ひどく人間味に溢れ親しみを感じたものである。

一口に三十三ヵ所札所といつても西国、坂東、秩父で夫々に趣が異るように思う。西国の霊場は観音信仰の発祥地で歴史も古く、天領に近かつた上信者も庶民であったせいか、ご本尊・堂塔に国宝や重要文化財級のものが多く、その後の維持も行き届き仏の温い慈悲の心と庶民の御仏への譜仰の心が柔かく融け合つているように感じられる。一方、坂東・秩父には武士社会の為か猛々しい仏の姿、悪人には罰をあてる荒ら仏の様相が奉納された絵馬、例えば秩父二十六番円融寺「平景清牢破り」の絵馬等からも窺がわれる。又明治維新の廃仏毀釈により七堂伽藍ごと取り壊された筑波大御堂（東・二十五）笠間正福寺（東・二十三）や無住の札所清滝寺（東・二十六）等等。秩父には三間四面のこじんまりした唐様の御堂や時には民家に同居した御仏もあり、それは又それなりによそでは見出すことの出来ない民衆との融け込みが感じられる。

観音めぐりというと抹香臭い想像が先に立つが、実際は若い人や二人連れ子供連れも多く、カラッとした明るいムードに溢れている。古来観音めぐりが庶民から歓迎されたのは、只観世音の名を唱えるだけで現実の生活で出会う諸々の災厄や苦難から救われる、という誰にでもわかり易く行い易いものであったこと、又巡拝する霊場が誰もが願ってやまない長寿、健康、安産子授けそれに商売繁昌などの現世利益の信心につながること、更には巡礼の旅が観光と共に心身鍛練や古えの歴史を振り返ることとも兼ねているからであろう。事実、霊場の中には国定公園や参詣道がハイキングコースに指定されているところも多い、そこではハイカー達も本堂に佗む時は自然に善男善女として神妙に頭を垂れ蠟燭をあげ線香を立て、鐘を打って願いごとを祈って礼拝する。これこそが人間本来の姿であろう。

百観音霊場めぐりは古えからの庶民の宗教としての観音信仰の一端にふれると共に、古い歴史や地方にまつわる豊かな伝説を系統立て、振り返ることが出来たし、歩くことによる体力づくりに随分役立った。観音霊場めぐりの次は弘法大師信仰の四国八十八ヵ所である。

新春雑感

中国支部長
松谷健一郎

会長の松田長三郎先生をはじめ洛友会の諸兄の皆様方、新年おめでとうございます。

さて、本日は新春のお屠蘇の肴

に、洛友会メンバーの小さな集いについてご披露しようかと思います。

昭和56年私が社長に就任して数か月後、松田長三郎先生からお手紙を戴いた。『今回貴君が中国電力の社長に就任され、北陸電力の森本社長、四国電力の平井社長とあわせ、洛友会のメンバーの中から同時に3人の電力会社社長を出したことは、真にお目出度い限りである。ついては、色紙をまわしますので御署名戴きたい。洛友会会報にも戴せたい。』との内容であった。暫くして、森本社長から色紙が回送されて来たが、森本社長の署名のとなりに大先輩である芦原義重関西電力会長（当時）の御署名があるのにはびっくりした。勿論、私も署名し四国電力の平井社長へ回送したわけである。

それから暫くして、森本社長から『我々の洛友会をやろうではないか。平井、松谷両君ともども奥さん同伴で北陸へ遊びにいらっしゃい。』とのおさそいがあり、3組の夫婦が北陸路に集うことななった。昼は、加賀百万石の名所旧跡を巡り永平寺を訪れて管長の御講話を聞き、夜は、山代温泉のホテル百万石で宴を催し、思いで話に花を咲かせたのであるが、宴の後温泉につかりながら洛友会の会員であることを嬉しく思ったことであった。

第一回目の集いが大成功だったので、次の年は私が中国地方の津和野、萩、湯田温泉方面をご案内した。その後、関西電力の森井社長もこの会に参加され四人となった。現在は、社長は一人になったがこの会は続いており、毎回夫婦同伴で楽しんでいる。

森井社長に京都をご案内戴いた時は、学生時代見る機会がなかった京都御所や修学院離宮等をゆっくり観賞させてもらった。また、保津川下りを楽しんだ後、嵯峨野の吉兆で観談したが、その折、年配の芸者さんに『京大の校歌をやってくれ』と言ったら、『京都大学の校歌とは何どすえ』と当惑するので、『月は朧に東山だよ』と言うと破顔して、祇園小唄を踊りと一緒にやってくれたことが懐かしく思い出される。

一昨年は、阿波踊りのシーズンに徳島で会合した。その時、ホテルに連を呼んで名人に阿波踊りのコーチを受け、全員が名取（名誉？）を貰った。一晩は、奥さん方は浴衣に赤いけだし、鳥追い笠に利休下駄、我々は法被と股引に白足袋という本格的ないでたちで、四国電力の連に入って踊ったことである。いささか疲れたものの久しぶりに若返った感じがした。

昨年は再び北陸に集まったので、今年は中国の番であるが、どこに案内をしたらよいのかと考えているところである。この集いの楽しい思い出は尽きないが、今後もこの洛友会を通じての交友関係を大切にしていきたいと思っている。

私は社長を八年間勤めたが、電事連の社長会議等に於て、同じ教室の卒業生がおられることは、大変心強いものがある。他の業界の方々にお逢いしても、京都で学んだと聞くだけで、直ちに上着を脱いだ気分で接せられるのは大変有難い。京都の洛北で学んだのは単に学問だけではなかったと、特に年を取って見ると、益々感じられる。誠に洛友会に心から感謝し益々の発展を祈るものである。

新春を迎へて

四国支部長　中川修一郎

新年お目出度うございます。

私は昭和15年春卒業してその夏入隊、翌年我国は戦争に突入しましたが、国敗れて山河ありで、故郷須崎へは足かけ六年ぶりに、茫然として生きて帰ったことでした。その後、日本は国民の勤勉努力によって、荒廃のドン底から今日の繁栄にまで立直る事が出来ました。軍隊ボケの私でしたが、電気エンジニアとゆうことで、当時の四国配電に入社出来、何を復興するにも先づ必要な電気エネルギーの増産と供給業務に専念出来たことを有難く思ってゐます。

私の青春時代は戦争直前の数年でありましたが、時にふれて学問のこと、人生のことなどあれこれと語り合った学友達の姿が、今なつかしく走馬灯のように脳裏を去来してゐます。夫々個性のあるい、連中ばかりですが、戦争の為もあり、もう大分減って残念至極に思ってゐます。

人間が遭遇するこの現実世界の現象について考へる場合、その思考には学問的なものと宗教（神秘）的なものと二つの範疇があるのでしょうか。科学者の場合には、利根川博士の云はれたように、いつも夢と冒険の気持をいだいて不屈の研究を続けてゐると、非凡な直感がひらめき、ノーベル賞に値するブレイクスルー（壁を突破する発見）が起ります。又宗教上のひたむきな求道者の場合には、三井寺の智証大師の例の如く、学を比叡山で修め苦修練行すること十二年、一生の信仰を決定づける黄不動尊を感得せりと伝へられてゐます。オプティミストかペシミストか、それによって人生に対する態度に、根本的な相違が生ずると思われますが、私達がそのどちらになるのかは、各人の自由意志によって、きめるべきものでしょう。

新しい年を迎へ、山にでも登って、広大無辺な星空を眺めながら、生命や人生とは何だろうかと考へるのも価値あること、思われます。

去る十月の洛友会々報で、立派な電気教室や研究棟などの竣工を知りました。あの赤レンガの門と銀杏の木は、多くの卒業生が仰ぎ見た姿をそのまゝに、教室入口に残されてゐる由ですが、往時を偲ぶよすがとして誠に有難くうれしい事です。

平成の新時代に入り、新装なった電気関係教室から、これからも立派な後輩達が続々と育ち、又独創的な研究が次々と生れんことを期待してゐます。

洛友会の先生方や会員の皆さん方が各方面において益々ご活躍されんことを、又ご愛庭ご一同様のご健康とご多幸をお祈りして、新年の挨拶といたします。

新年のご挨拶

九州支部長　上田保之

明けましてお目出とうございます。九州の地から輝かしい新春のお喜びを申しあげます。

洛友会九州支部が設立されました昭和30年代のはじめには、二〇〇〇名の卒業生のうち、九州支部の会員は一二〇名程度でありました。現在、支部会員は若干増加し、一五〇名強となっておりますが、卒業者数五〇〇〇名に対する比率は、設立時の半分以下の3％まで低下しております。

このことは九州経済の地盤沈下の影響とも考えられます。鉄鋼や石炭等の産業が華やかな頃には、九州の人口・面積に見合った全国比10％台の経済力がありました。しかし、現在では国民所得で九％工業生産額で五・六％、商業販売額で七％まで低下しております。この背景には、産業構造の急激な変化に九州の対応が充分でなかったこと、地方切り捨てとも思われる首都圏への一極集中の進行等が考えられます。このような環境にあって、九州が21世紀に取り残されないよう、財界・官界一体となって、既存産業の合理化、高付加価値化への展開はもとより、高度先端技術を中心とした新しい知識集約型産業への真剣な取り組みがなされております。

21世紀はアジアの時代とも云われております。九州の地域特性を考えて見ますと、また違った発展の可能性は大きいと云えます。

九州は地理的にアジア諸国と一衣帯水の関係にあり、九州は日本のどの地域よりも韓国・台湾・中国大陸の主要都市に近いわけで、この事を活かさねばなりません。また、九州には農業・水産業をはじめ、鉄鋼・造船・化学等の基幹産業とその周辺産業まで多様な地場産業を有しております。これにより培われた人材・技術、あるいは経営手法はアジア諸国が求めているものでもあります。さらに、九州は温暖な気候・雄大な自然、古い歴史と文化に恵まれており、個性に富んだ中核都市が点在しております。このことはアジア諸国に対して、多様な交流の機会と場とを提供できると思います。

このような地域特性を持ちながら、現状では九州とアジア諸国との国際化が進展しているとは思えません。アジア諸国の人達が九州に目を向けていただくためには、情報・新素材・宇宙・バイオ等の新しい産業の育成、国際的な研究機関の設立、国際的な交流施設の建設等の施策が必要と思われます。また、九州がアジアとの交流の拠点となるためには、国際空港とか国際港湾等の建設、個性豊かな中核都市間の交通体系の整備等、解決しなければならない問題は多いようです。

洛友会会員の方々が、それぞれの立場から九州の地域特性と今後の発展に目を向けられて、九州への企業の発展を俎上に載せていただきたいと思います。また、これから社会に出て行かれる卒業生がその若い個性と豊かな創造性を、九州の地で発揮していただきたいと思います。

日本のなかの九州でなく、アジアのなかの九州と云う視点が定着し、洛友会九州支部の会員数の卒業生比率が年々高くなりますことを祈念して、新年のご挨拶といたします。

会報一五〇号に寄せて

北海道支部長　池内義則

昨年10月9日、母校京都大学の西島安則総長が来道されたのを機会に、札幌市内で北海道京大会が開催されました。北海道京大会は道内在住の京都大学卒業生（全学部）の同窓会で、私が入会した昭和二十八年当時は札幌京大会と稱し、会員一〇四名の中、電気工学科卒は泉谷松太郎氏（大12）山上孝氏（大14）・橋本篤四郎氏（昭2）と私（昭21）の四名だけでありましたが、現在は会員数が五一二名になっており洛友会からは八名入会しています。初めは大先輩や文化系の人が多く、若輩の私には仲々馴染めなかったので一・二度懇親会に出席した後は暫く御無沙汰しておりました。今回、久し振りに出席したところ、当日の出席者数、五八名中わが洛友会から師尾（昭17）・谷村（昭31）・中山（昭33）の各氏が出席され心強く思いました。

この京大会の前日に、洛友会々報第一四九号（前号）が手元に届けられましたので、奇しくも、西島総長の写真入り御祝辞文を、初めて御本人に御覧に入れ、面目をほどこした感じでありました。西島総長は会の御挨拶の中で、京都大学の開学の歴史から今日までの隆盛と将来展望について述べられ、特に、同窓会の意義と重要性について言及されました。また、出席者全員に「春序」を配布され、総長時代の理念を一冊にまとめて示されました。

この度（昨年10月30日）突然洛友会本部事務局より電話があり、会報の原稿を書けとの由、何を書いたらよいか考えあぐねた末、手許のこれまでの洛友会々報を読み返しながら同窓会について考えてみました。

会報の創刊号巻頭に鳥養会長がいみじくも「私の長い世渡りから見て、人と人とのつながり位大切な、そして有難いものはない、まして、同学同門の好みは、それが偶然の運命的なものであるにしろ、吾々をどれだけ力づけておるか、今更言を要しないと思います。」と述べられ、また、「同窓会は、卒業生間の横と縦の連絡を主なる目的とすると思いますが、同窓会は主力を縦の連絡協調に置くべきであろう。」とも云っております。

私も今日までいろ〳〵な同窓会、またはそれに類する団体組織に所属し、多くの友人、知己と交わりながら恩恵に浴して参りました。洛友会を始め大学、高等学校、中学校の同級会や寮生活、部生活を通じて人と人とのつながりには特に関心が深く、北大で学生とつき合う場合にも同窓生の有難さを説き、教育の一貫として指導の寄りどころとしてきました。

同窓会を発足、維持、発展させるためには、それ〴〵の段階で種々の問題があります。

先づ、同窓会は一人や二人では成立しませんので、学校であれば、或る年月が経って卒業生が適当な数にならなければできません。発足のタイミングと呼びかけの母体すなわち同窓生の盛り上り、それに何よりも大切なことは同窓会の事務的な仕事に奉仕する熱意のある人材とリーダーが心要だということであります。これが発足に当

っての問題点だと思います。

次に、維持、発展に伴なう困難であります。同窓会の発足後、多くの場合、「どうも転勤者が多く、また、その転勤者からの連絡がなくて名簿の整理が大変である。」「会費の納入率が悪い。」「会報の原稿を集めるのにひと苦労」という苦情が聞かれます。同窓会の性質上、義務もなく強制力もないので、ある程度は止むを得ないかも知れません。しかし、要は同窓生一人一人が同窓会に関心を持ち、緊密な連絡をとることが最も大切だと思います。更に、支部組織や年次クラス集会の活用によって、いくらかでも政善されるのではないでしょうか。

第三の問題は同窓会母体の拡大と共に、母体（学科または講座など）毎の同窓会が生まれて、いくつかに分れることであります。問題にしなければ問題にならないことですので、もとは一つだという考えで、有機的な繋がりを持ちながら分離、統合されれば、会の更なる発展につながることと思います。

飜って、わが洛友会について考えますと、その発足は昭和二十八年、当時の鳥養会長を中心として、役員の大先生、大先輩、幹事役の先生方が打って一丸となり、基礎を築かれたわけであります。会則、役員が決まり、会報が発行され、各支部の発足と極めて順調な滑り出しでありました。その後、多くの諸先生、諸先輩、同窓生が、その時代々々で盡力されましたが、特に、現会長松田先生始め大谷先生、近藤先生には、洛友会発足当初から四十年に垂んとする長い間、会の育成に献身されております。お蔭様で私達は、一学科の同窓会としては全国に類をみない整備、充実した立派な洛友会を持つに至りました。このような洛友会も、前述した悩みがないわけではなく、私が特に気のついたのは、最近の会報に掲載されている会費納入率の傾向や、投稿される方の卒業年次などから、卒業後20年位の方の洛友会に対する関心が弱いのではなかろうかということです。私自身も覚えがあり、この時代は最も本来の仕事に打ち込んでいる時で、仲々余裕がないというのが実状であらうと思います。逆に、卒業後20周年、30周年……と区切りのよい時にクラス会が行なわれるようですが、これがキッカケになって各人の同窓会えの関心が高まり、卒業年次の古い方程洛友会えの愛着が強い結果になっているのではないかと思います。それが自然の成り行きかも知れませんが、フレッシュな卒業生の方にはどんどん〈投稿して貰って、同時代の卒業生の関心を利戟すれば、いくらかでも同窓会の発展につながるのではないでしょうか。

北海道支部は昭和40年代以降の卒業生が皆無で、若い人達えの話も出来ない状態でありますが、支部会員一同洛友会の今後の発展を切に祈っております。

名実共に平成時代の幕明けに当たり、記念すべき一五〇号の会報に寄せて、会長、諸先生、諸先輩の洛友会育成の御努力に感謝と敬意を捧げると共に、洛友会会員皆々様の御健勝を心より御祈り申し上げます。（昭21）

特別寄稿

明治村茶会

大正13年卒　本多静雄

私は今年で数え年だが、九十三歳になる。随分自分乍ら長生きしたものと思う。

京都大学の電気工学科を大正十三年の三月に卒業した。その時の電気科長は青柳栄司先生で、鳥養利三郎先生は、海外留学から帰られて高周波工学という新しい講座を持ち、正教授になったほやほやであったと思う。

同級生は始め五十名だったが卒業のときには三十九名ぐらいになった。それも、現在は九名しか生残っていないと思う。その内に、関西電力会長だった芦原義重君がおる。これは元気でまだ現役である。私も負けない気で現役の役職を一つだけ手放さないでいる。それは、エフエム愛知という名前のラジオ会社の会長職である。設立当初から関係、始め三年ばかりは社長をし、あと会長ということにしてある。余り大きな会社でないので、会長職などは不要なのであるが公益事業でもあり人から聞かれたとき「エフエム愛知の会長です」というとすぐ判って貰えるので便利である。そのせいか九十歳になってから名刺を持ち歩くことを止めたが、殆ど差し支えない。

芦原君とは卒業以来、何んだかんだと御世話になり、絶えず交際しておるが、去年の明治村茶会には「松永耳庵翁を偲ぶ茶会」ということで後々に書くように、芦原君は他の電力界の長老と共に世話人となり、松永亀三郎氏を席主として大寄の茶会を催した。

その茶会は我々二人にとっては想い出深いものであったし、茶会の趣旨が電力界の鬼といはれた松永安左エ門さんであるので「明活村通信」に寄せた私の報告からその大要を抜粋して付記する。

茶会の後、世話人と松永亀三郎氏、竹田弘太郎氏を交えて「松永耳庵翁を偲ぶ座談会」を催したが、これは洛友会には余り関係がないので省くことにする。

松永耳庵翁を偲ぶ茶会

床間一つ無い旧帝国ホテルの洋風建築を、どこまで茶会の席として利用出来るかを問いながら、之に、松永安左衛門（一八七五―一九七一）耳庵翁遺愛の品々を配置して、その生前の姿を彷彿させるのを、主目とした大寄の茶会である。

その遺愛品で第一のものは、国宝中の国宝といわれる釈迦金棺出現図で、之は、文部省へ寄贈して現在京都国立博物館に収蔵されているのを特に出陳して戴いたもので、外光を避ける為、特別の間仕切りをし、恒温恒湿のガラス張りのケースに入れた。

図は、摩訶摩耶経の説く、釈迦再生説法を画いたもので我国仏画中の唯一孤高の作品と評せられている。

釈迦が大涅槃に入ると、母の摩耶夫人が忉利天から棺側へ駆け付け、余りに悲嘆するので、釈迦が金棺から出現して生死の真理を説いたと伝えるもので、その時衆人歎喜し三千世界はことごとく震動

したという一種の復活伝説である。

基督は十字架上で処刑されたので、その信者達の胸に復活願望が強く起り、年中行事として復活祭まで設けられたのに比べて、釈迦の場合は大勢の信者・禽獣に囲繞された平安な死であるので、この種の復活伝説は極めて少なく、絵画としても稀有なものになった。平安時代作、作者不明である。

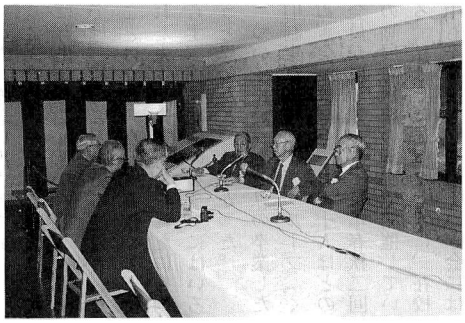
次の中二階には、迎付の気分を現わして、前田青邨（一八八五―一九七七）筆の耳庵像を掲げ、その前に玄々斎好みの点茶卓を置き、その上に、唐物砧青磁鳳凰耳花生に山芍薬を活け、その左に蒲生氏郷（一五五六―一五九五）作の茶杓を置き、唐物文琳茶入と置き合せて、四方盆の上に載せた。その左に織田有楽（一五四七―一六二一）所得有楽井戸を飾った。

本席には、玄関上の部屋を利用したため、大寄の茶会としては手狭であるが、とにかく一度に四十人宛、建仁寺茶会に倣った呈茶を試みた。

床に見立てた壁面に、「壱箇半箇　無又空」耳庵　八十八を掲げた。一箇半箇は、碧巌録の第二十六則百丈大雄峰の頌に見られるものであるが、「無又空」は見当らない。或は、耳庵翁その人の偈の語であるかも知れないと考える。その意味は、天下に覚者とか知己の少ないことを嘆いたものらしいが、その当否は見る人の解釈に任せる。之は、また、一種の収斂級数の形をしているのが、興が深いと思う。同室の反対側には、耳庵翁旧蔵の土肥二三の円窓と胡銅の花生を置いた。

その次の帰路に当るところには、翁が生前、客を送る慣しであった小田原の旧宅の欅の大木のある坂道に長い杖を持った生前の写真を置いて、之に仁清の吉野山茶壺を置いて景色にした。

以上は従来の茶屋の飾付の域を逸脱して、一種の演出になっている。之も今後の大寄茶会の在り方を示唆するものと考えるが、その当否は来観者の判断に任せる。



写真右から田中精一・芦原義重・永倉三郎・松永亀三郎・本多静雄・竹田弘太郎の各位

最も困ったのは、翁の遺愛品は、釜・茶碗等何れも名品で非常に多数あるが、之を実際に使うことは許されない、さりとて、実際に使わない品を並べるだけでは趣がないと考えて、点茶に実際に使う道具は世話人の本多静雄が翁の生前に、翁から、稽古用として茶道具一式を贈られた品々を使うことにした。

茶杓は、翁の自作、銘、五郎。釜は阿弥陀堂形。茶入は古瀬戸廣口。である。

茶碗は、瀬戸の作家十人、加藤鈔・加藤清之・加藤作助・加藤春鼎・加藤舜陶・亀井勝・鈴木八郎・鈴木五郎・大江幸彦・水野双鶴の各氏に、十個宛、有楽井戸に因んで井戸茶碗を自由に作って貰うこととした。この他、特に協力をいただいている加藤重高・山田和俊の両氏にも茶碗を依頼した。之等の作品は、茶会後、本年六月三十日～七月五日間名鉄百貨店で展覧会を催し、一般の人々にも観賞頒布する。

生花は総べて瀬戸の加藤清之氏の手を煩わした。

抹茶は、三河国西尾産の蓬莱昔、菓子は名古屋名物ういろうと氷砂糖。

茶会は本来、道具だけでなく、主客の面語歓談が主であると考えるが、大寄の茶会では之が困難である。それで、席主と世話人五人の座談会を帝国ホテル建物内で開き、その記録を後で、「明治村通信」に載せ、参加者には後送することにした。

水墨画と私

昭和12年卒
清野　武

ふとしたことが切っ掛けとなって、水墨・墨彩の道に迷い込んで十五年余り、お蔭で京大退官後も新しい生き甲斐を感じながら、適当に忙しく、適当に楽しく余生を送っている。

この切っ掛けというのも、昭和59年5月に開催していただいた古稀記念画展のパーティーにおける挨拶の中で述べた通り、誠にたわいないことであって、もっともらしい動機といえるほどのものではないのである。しかし今でも、私の前職を知っている先輩や知人から、また個展などを見て、始めて私の略歴を知った観賞者の方々から、なぜ絵を始めたのか、前の仕事とどんな関係があるのか、という質問を繰返し繰返し受けるのが通例になっている。

そのような場合私は、絵は六十才に近い頃から、自分の意志で趣味として始めたので、昔の仕事とは何の関係もない、とお答えすることにしている。要するに今は、絵が好きで、描きたいから描いているにすぎないのであって、強いていえば、長い間私の中に眠っていた「風羅坊」の如きものが、還暦に近づいて突然目を醒ましたということなのであろうか。

大学生の頃はもちろん絵の授業はなかったし、せっかく京都に住みながら、古美術にも現代絵画にも殆ど無関心で過してしまった。また小学校・中学校時代も、図画の時間以外に絵筆を持つことはなかった。

ただ誠に不思議なことであるが、幼稚園に通っていた頃のかすかな記憶の中に、かなり鮮明な場面が一つだけ残っている。それはある日の絵の時間（今の子供は「お絵描き」というが当時は図画といっていた）のことであった。ほかの

子供全員には、風にひらめく国旗の形に切って、日の丸の所が窓になっている薄板が配られたのである。それはこの板を型紙のように使い、鉛筆で輪廓と日の丸をなぞり、日の丸を赤く塗ってから、旗竿と球を自分で描き加えるという作業をやらせるためであった。しかるに私の机の上には、旗の代りにクレヨンの箱がどっかと置かれ、先生からあなたはこれで自分の好きな繪を描きなさいといわれたのである。

私も皆と同じように、新しい道具を使ってへんぽんたる日章旗を描きたかったのであるが、それをやらせてもらえなかった不満と、何か自分だけが特別扱いを受けたという優越感（もちろんそれほどはっきりした意識はなかったが）のようなものが入り混って、一人淋しく画紙にクレヨンを塗りつけていたのを想い出すのである。

こんな扱いを受けた経験は、後にも先にもこれきりで、小中学校では、絵のことで特に注目されたことはなかったし、高校でも、優れた先生や先輩がおられたにも拘らず、美術関係のクラブにはいろうと思ったことはなかった。

ついでにいうと、私の卒業した旧制東京高校の美術グループ『くぬぎ会』は、今でも五十人ほどの会員が属しており、毎年春秋二回の画展を銀座の画廊で開催している。私は上に述べたように、在校中も卒業後も、このくぬぎ会には殆ど全く関心を持たなかったが、京大退官後、奨める人があって、第41回展（昭和54年3月）から参加させてもらっている。

当然のことながら、この画展では洋画（特に油絵）が在倒的に多く、水墨は孤軍奮闘の有様であるが、お互に忌憚のない批評ができる楽しい会であり、アマチュアとはいえ、何十年もの画歴を持った先輩の作品には、心を打つものも少なくないのである。

さてここで少し水墨画に対する私の考え、というよりは全く主観的な好みのようなもの、を述べてみたいと思う。普通には水墨といえばすぐ南画か俳画を連想する人が多いであろう。また水墨画が禪宗と一緒に（正しくは禪僧と一緒に）日本に将来されたという歴史のために、水墨即禪宗という観念に囚れている人も少なからずあると思われる。もとより、南画、俳画、文人画、禪画それぞれの意義はあるにせよ、それらが何らかの今日的な魅力をもち、現代の心に訴えるためには、単なる伝統の維持に止まっていたのではだめであろう。

絵画史に名を残す大家の絵がすべて我々に感動を与えるとは限らないし、観賞者の嗜好がさまざまであるのは当然であると思うので、敢えて私の好みを申すならば、約五百年前の『破墨山水』（雪舟等楊）、四百年前の『松林図』（長谷川等伯）、あるいは少し下って約二百年前の『月夜芭蕉図』（伊藤若沖）その他、見る度に瑞々しい魅力をたたえて深く心に迫るものがある。

それはおそらく、これらの作品が必ずしも正統的な（今日の言葉でいえばアラデミックな）規制に縛られたものでなく、それぞれ独自の世界から生まれたからではあるまいかと（素人考えながら）私には思われてならない。等伯や若沖の反骨精神はよく知られている通りである。また同じ作家の絵でも、いわゆる『眞』（書道でいう楷書）のスタイルで描かれたものには、それほど感動をおぼえないものがあるのも、同様の理由によるのではあるまいか。水墨画には先人の残した技法の宝庫（運筆）があるが、ただそれを文字通り墨守していたのでは、近代繪画とはなりえないであろう。しかしどうすれば水墨画が将来も瑞々しさを保ちながら存続しうるか、これは余りに重大な問題である。

それはともかくとして、ひとたび墨の魔力に取りつかれた者は、容易にそれから逃れることはできない。私のように、老境に入ってから自己流で始めたものがいくら頑張ってみても、大したことができる筈はないのであるが、それでも絵が描けなくなるのは死ぬよりつらいことなのである。負け惜しみかも知れないが、囚われない我流の気安さというものは、かえってプラスの要素になるかも知れないと、秘かに思ったりしているのである。

何れにしても、いまさら手を拡げては虻蜂とらずに終るにきまっているから、殆ど植物ばかりを相手にしており、風景（山水）や人物は始めから諦めて手を染めようとは思わなかった。

しかし一口に植物といっても、季節と共に新しい生命が芽生え、また植木や植草や落葉ですら、捕え方によってはちゃんと絵になるのであるから、モチィーフに事欠くことはないと思っている。梅を描き、椿を描き、薔薇を描き、また毎月姿を変える草を追い、あるいは四季の雑草と親しみ、毎年同じような画材に繰返し接しながら飽きることを知らないのである。

無我の境には程遠いにしても、

しばし自然の対象に没入できることは、絵を描く者の幸せというべきであろう。

退屈しない、健康によい、人に迷惑をかけない、など実利的な面で、絵が『良い趣味』の一つであることは広く認められている通りであるが、その道にのめり込めばそれなりの悩みもあり、美術家の世界も、中にはいってみれば、必ずしも美しいことばかりではないことが分る。しかしそれはそれとして、見る人に安らぎを感じてもらえるような『自分の絵』を少しでも多く描くことに、いくばくもないであろう余生を捧げたいと思うのである。

付記(1)　大谷副会長のご依頼で水墨画の小品四点をお目にかける次第であるが、羅漢や仁王が混じっているのは本文と予盾していると見られるであろう。これについては別の機会に述べたいと思う。

付記(2)　殆ど独学の私には画歴というほどのものはないが、いつの間にか個展も11回を算え、その合間に公募展、グループ展などが加わり、質はともかく数だけはかなり賑やかになった。今の時点で整理してみたのが別表である。

清野蒼花画歴

○第1回（1979.11），第2回（1981.1），第3回（1981.11），以後毎年11月に作品展を開催（第9回以降はギャラリーイノダ）（京都）
○1988.5より毎年5月に小品展を開催（画廊サンフラワー）（京都）
○画廊による企画展：志摩画廊（1989.4：1989.8（：ギャラリーヒルゲート（1989.7）など　（京都）
○1984.5古稀記念展（思文閣）　（京都）

公募展

○日本墨相展第1回（1983.7）より第6回（1988.9）まで毎回出品（神戸，大阪，京都）
○Salon Biennal 1985入選　（パリ）
○Le Salon 1988入選　（パリ）

選抜展

○日本墨相展選抜東京展（1986.12：1987.12）　（東京）
日本墨相展選抜大阪展（1987.8）　（大阪）

グループ展

○旧制東京高校くぬぎ会展第41回（1982.3）より毎回出品（毎年3月と9月　（東京）
○左京医師会（会員と家族による）作品展（1981.3：1983.1：1984.11：以後毎年11月）に毎回出品　（京都）
○日本墨相展三人展（武井，清野，今井，1987.12）に参加　（東京）

その他

○関西盲導犬協会チャリティーバザー第6回（1988.1）以降毎年協力　（京都）
○表展（表装展覧会）第66回（1981.12），67回（1982.12），69回（1984.12），以後毎回協力（出品者は浜田清翠堂）　（京都）

海外旅行断章

昭和14年卒
田中哲郎

海外旅行ブームの今時、旅行談など書くのは余り気が進まないのであるが、事務局からの要請により止むを得ず筆を取った。

京大にいた頃は国際学会で海外に出掛ける機会を利用して、ついでに旅行を楽しむのが関の山であったが、昭和五十四年に京大を去り詫間電波高専の校長になってからは、仕事の内容がすっかり変り、夏季休業中は仕事らしいものが余り無いので、殆んど毎年八月は海外に出掛けた。元来私は山歩きが好きで、日本の山もよく歩いたが、ヨーロッパアルプスは更に魅力的なので、これが海外旅行の大きな目的の一つになった訳である。

しかし折角ヨーロッパまで行くのだから、山だけで済ますのは勿体ないので、まだ見ていない国や地方、あるいは都市、湖、地中海の島々などを毎回旅行ルートに組み入れて来た。たとえばある年はイタリア、次はスペイン、その次は北欧四ケ国といった風である。約三年前に高専を辞め、公職からすっかり解放された後は、いわば年中休暇の身となったので、季節の制約も無く旅行期間も長くなり、二ケ月以上に及ぶこともある。

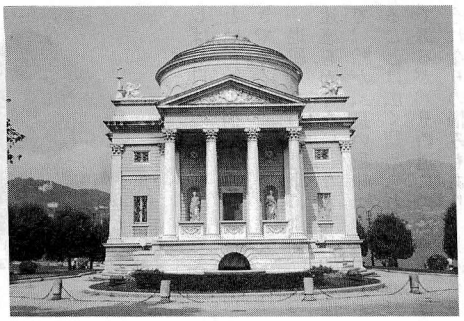
一昨年は七月末日に京都を発って十月十一日に帰着という二ケ月半の長旅であった。都市やアルプスや地中海の島（スペイン領マジョルカ島）などごちゃ混ぜの旅であったが、アルプスの南側山ろくの湖へ出たのは九月の初旬であった。湖は沢山あるがそのうちマジョーレ湖、ルガノ湖、コモ湖などが風光明美で有名である。湖畔の街としてはマジョーレ湖のほぼ北端にあるロカルノ、ルガノ湖畔のルガノ、コモ湖の南西端にあるコモ市が観光のセンターである。私はロカルノの郊外にあるアスコーナという小さい湖岸の町に四日間泊った。

アスコーナ滞在中のある日、折角来たのだから有名なコモ湖も見ておきたいと思って日帰りでコモを訪れた。九月十日の事である。コモに着いたのは正午少し前であった。鉄道のコモ駅は高みにあり、駅から湖と市街が見渡せて眺めはよい。大聖堂のドームを見当てにして湖岸の方に真っすぐに降りて行き、ドームの見える右手に廻ったところで広場に出た。ふと見ると大きな石造りの台座の上に大きな像が立っている。誰の像かと思って正面に廻って見ると、何とヴォルタの像であった。（写真1）

アレッサンドロ・ヴォルタといえば電池を発明して電磁気学および電気工学の道を開いた電気学の始祖である。ガルヴァーニの動物電気の研究を受け継いでこれを発展させ、純化学作用によって定常電流を取り出し得るようにした電池の発明は十八世紀末から十九世紀初頭にかけて完成されたが、これはまさに十九世紀の華々しい電

気磁気学の開幕を告げる世紀の大発明であった。

ヴォルタがコモの人だということを全く知らなかった私には、この風光明美なコモ湖畔でヴォルタの像に接したのは驚きでありかつ喜びでもあった。駅の観光案内で貰った案内図をよく見ると、この広場はヴォルタ広場と記されていたが、その案内図にはそこから程遠くないところにヴォルタの堂（TEMPIO VOLTIANO, TEMPLE OF VOLTA）のあることが記されていた。そこで早速これを見に出掛けた。湖畔の公園の最も美しいところに、これまた美しい堂が建てられている。（写真2）



ところが残念なことにその日は休館ということで中には入れない。入口でねばって頼み込んで特別に入れて貰った。それはいわばヴォルタの記念館で、中央ドームの下は円柱で囲まれた小規模ながら荘厳な趣をもつ広間で、色々装飾が施されており、両側はヴォルタが実験に使用した器具類が整理して展示されている。その日はこの広間で何かのパーティがあるそうで、その準備のため騒ぎうしく、ゆっくり見ることも出来ないので、写真を数枚撮って外に出た。この街の大聖堂も立派で、歴史の重みを感じさせるものであった。

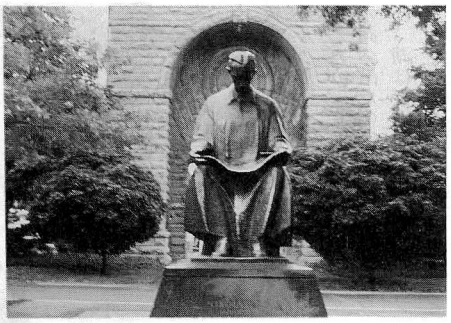
この湖を去ったあとフランスのシャモニー・モンブランで十日間ほど山を楽しみ、グルノーブルを通ってリヨンに入り、リヨンから南仏の旅に出掛けたのであるが、リヨンで心残りの事が一つある。リヨンはフランス第三の大都会で、絹織物の街、グルメの街として知られており、一日や二日の滞在でこの街を知ろうとするのは元来無理であろうが、心残りというのはこうである。

リヨンには二つの国鉄の駅があり、そのうち第二の駅パラッシュに近いところに地下鉄のアンペールという名のついた停留所がある。電流の磁気作用を解明したアンペールにゆかりの場所に違いないと思ったが、他に見るものが多く、日も暮れて終ったので翌日に廻してホテルに引き返した。ところがホテルが混んでいてもう一日滞在する部屋が取れないので止むなく翌朝出発して終った。帰国してから調べるとアンペールはやはりリヨンの出身であると記されていた。

昨年は八月二十五日に出発十月十二日帰国という旅程であったが今回は少し趣向を変えてアメリカ経由でヨーロッパに行った。先ずニューヨークに入り、そこからモントリオール、オタワ、トロントを見物してバッファロに入りボストン、ワシントン、マイアミ等で遊んだ。トロントからナイヤガラ見物のためバッファロに着いたのは九月五日であった。

ナイヤガラは三十年前にも一度来たことがあり、カナダ側からの滝の眺めが一番良いので、滝に一番近いスカイライン・フォックスヘッドというホテルで二泊した。ホテルの前のプロスペクト公園からの眺めを楽しんだあと、今回はテーブルロックハウスから黄色いレインコートを着てエレベータで地下に降り、トンネルを抜けて滝壺見物をし、さらに観光ボートに乗ってしぶきを浴びながら滝壺巡りをするなど充分にナイヤガラを楽しんだ。

夕方五時を過ぎてからであったが、アメリカ滝とカナダ滝の間にある中の島すなわちゴート島に行って見ようと思い、タクシーでゴート島に出掛けた。ここからの眺めはまた違った風景になる。カナダ滝もよいしアメリカ滝もアングルが変ると全く変った趣になる。まずカナダ滝に接近して眺めたり写真を撮ったりしたあと、アメリカ滝の方へ歩いて行く途中に大きな銅像が建てられているのに気付いた。近づいて見ると台座にニコラ・テスラと書いてあった。（写真3）



ナイヤガラの落差を利用した水力発電の事は三十年前に来た時から知ってはいたが、その創始者がテスラであるとは知らなかった。テスラといえばテスラコイル（テスラ変圧器）などで知られ、また強い磁束密度の単位（一テスラは一万ガウス）にもなっている人である。帰国後調べたところによると、テスラはユーゴスラビアの北部クロアチアの出身で、グラーツT・H、プラハ大学に学び、パリに出て電気技師として働いたあと米国に渡り、エジソンに見出されて職を得た。しかしエジソンと意見が合わないため独立してテスラ電気会社を興している。テスラは独自に新しい多相交流発電機・誘導電動機・変圧器等を開発した。当時エジソンがGEと組んで直流式発送配電の事業を手広くやっていたのに対し、テスラはウェスティングハウスと組んで交流方式を確立し、ナイヤガラ発電所でも多相交流方式を用いて発送配電を行い、十万馬力以上の電力輸送に成功したと記されている。

テスラはまた無線通信においても多くの独創的研究を行い、この分野でもマルコーニに匹敵するかあるいはそれ以上の仕事をした由であるが、時流に乗らなかったためか余り高い名声を博していない。しかし少くとも電力工学の分野においては、第一級の偉大な開拓者であることは間違いない事である。

以上最近の海外旅行の経験のうち、洛友会誌にふさわしいと思われることだけを書いて見た。旅に出る前に充分調査して、計画的に旅行すればもっと能率のよい旅行が出来るのは当然であるが、私は

それを余り好まない。何故なら偶然性や意外性は旅の大きな魅力で、それが無くては旅行はつまらない退屈なものになりそうだからである。今後とも気の向くままの旅行を楽しむつもりである。

故関野弥三先生を偲んで

大正14年講卒
森　芳郎

今思い出すと数十年昔の事になるが、大正十五年卒小宮義和氏が「洛友会三十年史」に対する感謝と題して洛友会々報の記事中に、『洛友会前身の電気教室懇話会を非常な御努力でお世話下さった助手関野弥三氏を是非何かの形で顕彰して頂ければと考えて居ります。

又実験の事で鳥養先生から聞いた話に「ガルバノメータを出しておいて貰いたいと頼んでおいたら、関野氏がちゃんと据付けて調整までしておいて呉れた。実験する者には、測定装置が果して正確かどうかを確めておかねばならぬ、この心掛けが実験には大事だ」と伺ったことがありました。この慎重な用意周到さで、電気教室懇話会の名簿作りなどをして下さった結果が今日の洛友会名簿が立派に残って居ると思います。又名簿作成には毎年度の卒業と同時に就職先・住所などを確めておいて、のちにその変更を加える様にしないと、何年か後に俄かにやろうと思って出来るものでないらしい。そのことからも関野先生の御苦労はいくら感謝しても感謝し切れない』…とあり、昔の事をよくご存じの方は、御同感だった方が多かったと思います。が、今は亡き関野先生にどうしてあげる事も出来ないばかりか、御子息に御縁の薄かった先生には、あとを継ぐ御子達がなく、御養子はあったが、第二次戦争中軍隊で御発病された事がもとで先に逝かれ、二度目の最愛の奥様に見守られ、且我々同窓の一同から尊敬と親しみにあふれた気持でお守り申し上げた甲斐もなく安らかに御永眠になって三十数年になります。残された奥様には最近まで藤村俊一氏始め我々同窓生が、色々と精神的な御苦労の多かった御生活に、一生懸命お力添えをした訳ですが、数年前に亡くなられました。勿論奥様の御存命中の昭和四十四年五月十八日には、先生の七回忌の法要を、白坂勇城氏等の骨折りで、南禅寺天授庵で盛大に行い、奥様は勿論のこと、教室の先生方も沢山の御列席を得て喜んで頂きました。昭和五十六年七月十二日には山口敬二氏の菩提寺の無学寺で同窓だけで静かな法要をいとなみました。奥様亡き只今では、先生方の菩提寺のお墓も何処で誰がお守りして居られるか、或いはお守りする方が無いのではないかと案じて居ります。尚私は一度せめて洛友会名簿のどこかに、御名様だけでも残して頂きたいと思ったことがありましたが、会則からどうする事もできないことを聞きましてあきらめて居ります。元教授の先生でお二方だけ連絡先不明で御名前だけ残って居ります。

関野先生は京都大学御在勤の最後は講師ですから仕方ないと思いますが、洛友デルタ会の者は倖にも名前が残るのに何か特別の御計らいで説明付で関野弥三と云う字が名簿の一部にあってほしいと今でも思って居ります。

今回計らずも会報に何か書く様に編集氏から御申付があり、せめて洛友会々報紙上に関野先生御逝去三十数余年の只今、記憶の万分の一でも書かして頂くのは誠に有難いことと御引受けしました。

そんな訳で洛友デルタ会の会員方はよく御存じの事位しか書けませんが、或いは御存じない方々に知って頂けたらと思う事を復習しただけになりました。但し関野先生の御経歴については、青柳栄司先生が昭和六年三月、御還暦を迎えられ卒業生一同が〝噪音集〟と銘打って青柳先生の思い出を書き、之を活字にせず、全部肉筆をそのまゝ石版で綴った文集がありますが、その巻頭に青柳先生御自ら「感激に浸りつゝ、記憶を巡りて」と題しての思い出の数々を随分何ページかに書いて居られますが、関野先生の思い出が随分沢山書かれてあります。

その始めに『関野氏は自分と前後して教室に勤務されたが、私は間もなく留学し、帰朝後に初めて面談を得た関野氏は明治三十三年八月九日助手として就任（関野先生は東京の物理学校御出身）せられ、教室のため、又電気工学講習所のため一方ならずご盡力され、昭和七年二月講師に栄進された氏に対する思い出は沢山あるが』と云う所から始っています。

明治天皇の崩御により国を挙げて最大の不幸と悲哀に当面したが御鴻恩の万分の一でも報い奉ると共に聊か期界に奉仕せんが為に、有意義な記念事業を行いたいと考え電気評論の発刊（現在電気評論社は財団法人近畿地方発明センター内にある）、次に、電気工学講習所を設立し高等補習教育の一機関たらしめることの趣旨に教室の各位の意見一致を得、自ら講師となり、しかも奉仕的に教鞭をとることを申し合せ、大学の電気教室を利用し、夜間授業を開設することになった時の沢柳総長の御厚意を得て、関野先生はその時分から、電気工学講習所の運営に専念された。又財団法人青柳研究所（現・応用科学研究所）の設立と併せ、青柳先生は三事業を開始されたこと等、詳細に且長文の記事を書かれておりその中に関野先生の御貢献の数々が記されています。

其後諸状勢は色々と変化をたどったが、昭和十二年頃、私立の諸施設を学内に置かれなくなりそうな空気を察知された事と電気工学講習所の卒業と同時に国の資格を認可して貰う為、愈々学外に此の施設を移転する必要が生じ、関野先生を中心として卒業生から母校移転資金を募集する委員会制度が発足した所、たちどころに金三万円の募金に成功した。その頃、現在のNTT吉田営業所・近衛中学や近衛銀座の北側の住宅一列等が、当時の府立一中の用地であったが、夫が只今の洛北高校の位置へ移転することとなり、その一部を購入しようと云う話があったが、前後して立命館大学から京都大学工学部教授に理工学部の増設に関し協力してほしい旨の申し入れがあり、一挙に立命館高等工科学校の設立の足掛りが出来、本野亨先生を校長として関野先生も同時に移られた際に講習所の学籍簿や、所有の実験器具等も移設して発足したわ

けである。

今年が電気工学講習所が七十五周年になる。このことは立命館大学理工学部創設五〇周年校友大会の開催された案内にも述べられて居る。

以上、故関野先生の思い出を中心として、とりとめのないことを書きましたが、ご判読いただければ幸いです。

（平成元年十一月十日）

教室だより

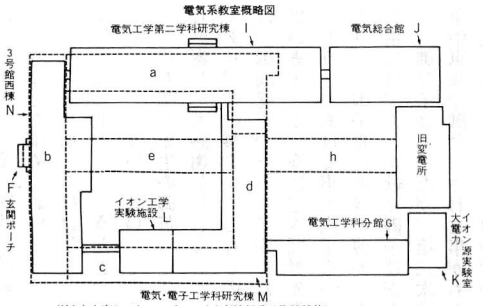
電気系学科等研究棟（西館）の完成にあたって

電子工学教室教授
川端　昭

このたび工学部3号館西棟が竣工いたしました。この建物は、イオン工学実験施設、重質炭素資源転換工学実験施設、応用システム科学専攻研究棟および国際交流交室ともに電気系教室研究棟（西館）を含めた合同庁舎として新築されました。この機会に電気系教室の建物の変遷について記しておきたいと思います。

京都帝国大学は、日本における二番目の大学として、明治30年6月に設置され、同年9月に理工科大学が土木工学と機械工学の2学科で発足しました。日清戦争後で経済状況が悪い上、建設工期の関係で、すべての建物は木造でした。明治31年に電気工学・採鉱治金学、製造化学の3学科が開設されました。

電気工学の建物は、明治33年から35年にかけて、赤レンガ造り平屋建てとして（図のa、b、c、d棟）口の字形に建設されました。レンガは英国から輸入され、一個づつブリキ缶に入れて送られてきたので、レンガのことをブリック



(注)小文字(a、b、c、d、e、h)点線部分は取壊建物
大文字(F、I、J、K、L、M、N)実線部分が現在建物

と呼んだという話が伝えられています。したがって、京都帝国大学では、新築された最初のレンガ造り建物で、この様式は昭和初期まで踏襲され、大学のシンボルとして雰囲気の形成に大きな役割を果たしてきました。

大正3年に小規模な増築がありましたが、大正10年に大規模な増築が行われました。図のe棟が完成され、口の字形から日の字形に、bとc棟にそれぞれ2階部分が増築され、さらに玄関ポーチ（F）が取り付けられました。銀杏の木を配した玄関ポーチの風景は、電気系教室のシンボルとして、多くの卒業生の脳裏になつかしい想い出の一コマとして刻み込まれています。

その後、昭和9年、15年および19年に増改築が行われましたが、詳細は表と図に譲ります。昭和29年に電子工学科が設置されましたが、建物は新築されませんでした。

昭和36年に電気工学第二学科が設置され、昭和38年から39年にかけて、a棟とd棟の一部を取り壊した跡地に、工学部3号館として地下1階・地上4階の鉄筋コンクリート造りの研究棟が完成しました。また、同時期に関西電力株式会社の寄付により、電気総合館が新築されました。

昭和50年には電子工学科付属の大電力イオン源実験室が、また、昭和55年にはc棟の一部を取り壊した跡地に、工学部付属のイオン工学実験施設（L棟）が、さらに、昭和57年にはcとd棟の残部およびeとhの両棟が取り壊され、電気・電子工学科研究棟（M棟）が、何れも鉄筋コンクリート造り、地下1階・地上4階で新築されました。つぎつぎと赤レンガ造り建物が消えていく中で、歴史的に最も古い西館（b棟）については、何とか保存したいという願いが強く、保存建物との調和を考えて、LとM棟の壁面は、赤レンガ色モルタル張りとされました。

電気系教室では、西館（b棟）を歴史的建造物として保存する方法を模索し、外観保存・内部改築の方向で関係部局と折衝して参り

電気系学科建物変遷一覧表（主要なものに限る）

年代	建　　物	備　　考（図参照）
M.33	赤レンガ造り平屋建	aとb、dの北半分（⊓の形）
M.35	〃	aとb、dの南半分（⊔の形）
T.3	〃	eの東寄りの一部
T.10	〃	eの残り部分（e棟完成）
〃	赤レンガ造り2階部分増築	b、cの2階部分増築
〃	赤レンガ造り玄関ポーチ	F
S.9	鉄筋コンクリート造り（地下1階、地上2階）	G
S.15	鉄筋コンクリート造り平屋建	h
S.19	木造2階部分増築	h、dの2階部分増築
S.38〜39	鉄筋コンクリート造り（地下1階、地上4階）	I電気工学第二学科研究棟（aとdの一部取壊） J電気総合館（関西電力KKの寄付）
S.50	〃	K大電力イオン源実験室
S.55	〃	Lイオン工学実験施設（cの一部取壊）
S.57	〃	M電気電子工学科研究棟（c、dの残部とe、h取壊）
H.1	鉄筋コンクリート造り（地下1階、地上5階）	N3号館西館（bの取壊）

ました。しかし、建築費が高額となることと、国の緊縮財政のために実現には至りませんでした。しかし、関係部局のご理解と多大なご努力の結果、歴史的建造物として外観保在の主旨が尊重され、巨大なキーストンを戴いたアーチ形の玄関ポーチと両サイドの壁面の一部を構造補強し、新営建物の正面玄関として組み込み保存することとなりました。したがって古きものと新しいものとの調和が配慮され、工学部内の従来の建物とは異なったデザインのもとに、工学部3号館西棟が実現されました。本部構内では初めての5階建てで、2教室・2施設などの合同庁舎であります。平成時代における建物新営の先駆的役割を担うように思われます。

以上、電気系建物の足跡について記してきましたが、電気系教室の一員としては、何よりも玄関ポーチ付近が昔の姿のまま保在されたことに感謝しております。竣工にあたり、ご尽力とご協力を賜りました文部省、大学当局、学内関係部局ならびに工事関係者各位に感謝の意を表したいと存じます。

電気系教室懇話会 秋の講演会

恒例となりました電気系教室懇話会秋の講演会が去る10月14日(土)午後に開催されました。本会は、各分野でご活躍の先輩の方々のご講演とそれに続くビアパーティで、諸先輩と教室・学生の絆を強めることを目的に、毎年開かれております。

本年は、

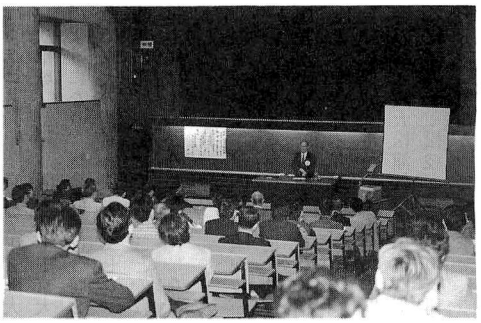
日下部悦二氏（古河電気工業株式会社取締役会長、昭和21年卒）

伊藤俊郎氏（三菱電機株式会社取締役技術本部副本部長、昭和29年卒

池上淳一先生（福山大学工学部長、京都大学名誉教授、昭和18年卒）

の三人の方々にご講演をお願いしました。

第一部の講演会は、大谷泰之名誉教授をはじめ先輩各位が多数参加され、教職員、学生を含めて、午後1時から電気総合館大講義室において開催されました。松波（電気工学第二主任）の司会で、西川教授（電気工学主任）の開会の挨拶があり、引き続いて、来春卒業予定の修士課程2回生（豊田、西野、属、河野、磯崎君）と4回生（高岡君）により、就職先決定時の意志決定と大学院入学試験に関する体験談を聞きました。それぞれの諸君の意志決定にはユニークさがあり、興味深く聞くことができました。



続いて、先輩のご講演に移り、まず、日下部悦二氏から「私の過ごしてきた会社生活」を伺いました。戦中、戦後の大学生活、就職時の指導教授の教え、入社後の実習や人とのつきあい、当時の大学卒の立場など、現在では想像しにくい環境を紹介されました。会社生活を通して、自社の変遷、自動車やエレクトロニクスなど各種産業の変遷などを経験され、要職を勤められるなかで確立されました、製造業における技術者のモットーを披瀝されました。

休憩の後、小倉教授（電子主任）の司会で会が進められ、伊藤俊郎氏が「21世紀をめざす技術について考える」を講演して下さいました。まず、戦後の技術発展を、(1)欧米社会への憧れ（米国技術の導入・吸収）の時代、(2)石油ショックに誘引されての省エネルギー・省資源の発想にたった技術開発の時代、(3)今後へ向けての高度情報化社会の時代の三つに分けられ、それぞれの特徴を概観されました。ついで、現在と今後の社会を支える半導体技術の重要性を述べられました。今後、①システムエンジニア的思考、②原子、分子レベルの制御による物づくり、③空間利用の発想、④国際性、⑤人手不足を考慮した技術開発を考えなければならないことを、いくつかの事例を引用されながら、強調されました。

最後に、池上淳一先生から「雑感」と称して日頃お考えのことがらを伺いました。福山大学での生活を含めたご近況を中心に、京都大学がいかに恵まれているか、社会が京都大学の卒業生に期待していることの大きさを強調され、関連して、大学教育の位置づけ、学生の評価の困難さを論じられました。社会問題としての環境、老人問題を軸に、お考えになっていることを紹介されました。最後に、新装なった西棟の感想を述べられ、洛友会への若手の参加を要請されました。

西川教授による閉会の辞の後、新装の西館の一階部分、工学部国際交流室のロビーを見学していただきました。ご一同は、従来の大学では見られなかった高級志向のロビーや調度に、隔世の感をもたれたようでありました。

懇話会の第二部ビアパーティは、午後5時頃から生協北部食堂二階の“喫茶ほくと”で始められました。小倉教授の司会で、西川教授の挨拶の後、大谷先生の乾杯のご発声で進行いたしました。先生は、ご近況、洛友会の近況報告に続いて、西棟開所式での西島総長のご挨拶（注）を丹念に紹介され、「電気評論」発刊の頃の電気工学教室の先達の将来への卓見を今後の教室関係者に期待したい旨の発言をされました。参加者は優に一〇

○人を越え、“喫茶ほくと”のフロアは溢れるばかりの盛会となりました。ご講演下さった先輩を囲みながら、関西地区の諸先輩を含めてあちこちで会話に話が咲き、最近の学生気質から、今後の電気・電子工学や産業の展開など、話題が尽きない楽しい会合となりました。午後7時前に閉会いたしましたが、用意した食べ物・飲物ともかなり多く、参加者には堪能して頂いたものと確信しております。

最後に、懇話会行事に際しまして、ご多忙の中にもご講演を快くお引受け下さいました三名の講演者の方々、ご出席頂きました名誉教授の先生と諸先輩の方々に厚くお礼を申し上げます。（文責　教室主任　松波）

（注）洛友会誌10月号に掲載。

京大―阪大電気系教室スポーツ大会報告

去る7月8日㈯午後、平成元年度（第32回）京大―阪大電気系教室交歓スポーツ大会が京大主催で開催されました。ここ数年来、関西電力の水無瀬体育施設を借用し、5種目全競技を一箇所で開催することが恒例となっています。本年の梅雨は比較的雨が少なかったので当初は天気のことをあまり心配していなかったのですが、その週の初めからずっと雨が降らず、かえって前日ごろから週末の天気の心配が首をもたげてきました。案の定、午前中雷雲のようなものが陽を遮り、夕立がくるのではないかとはらはらしておりました。とにかく、午後0時半頃に教職員・学生約八〇名が2台のバスに分乗して京大正門を出発、ほぼ1時間後に水無瀬体育施設に到着しました。前年度5種目とも敗戦の憂き目を見ていますので、教室主任3人ともかなり力を入れ、準備の委員会の席上から、選手諸君に練習をしっかりやってもらうように5人の監督に依頼致しておりました。バスのなかでも勝利のための檄を飛ばし、勝利チームには教室主任から特別賞をだすことを約束致しました。

京大チームの到着に遅れること一五分、阪大チーム約七〇名がバスと乗用車に分乗して到着、京大が機先を制することに成功しました。なんとなく先行きの明るさを感じました。この頃お天気はすっかりよくなり、まったく雨の心配はなくなりました。

午後一時四〇分頃から、施設の事務棟前の広場において開会式が行われ、京大倉光講師（電気）の進行で、西川教授（電気主任）の歓迎の挨拶、阪大松浦教授（電気主任）の挨拶後、去年度優勝の各種目監督から勝利杯の返還が行われました。午後二時から競技に移りました。幸いにしてたいへん暑い日になり、スポーツには絶好といえるコンディションで、選手諸君には思いきり汗を流してもらう機会となりました。

野球、ソフトボール、バレーボール、テニス、卓球の5種目に熱戦が繰り広げられ、手に汗握るの表現がぴったりのシーンがいくつも見られました。

結局、戦績は

野球　京大5―2阪大
ソフトボール　京大7―2阪大
バレーボール　阪大2―0京大
テニス　京大7―2阪大
卓球　阪大2―1京大

のようになり、総合成績は3勝2敗で京大の勝ちと決まりました。昨年の屈辱が払拭できたことで教室主任はすっかりごきげんになりました。

引き続いて午後四時半頃から一〇人を越える参加者が集まり、施設内の食堂で懇親会がもたれました。京大松木講師（電気）の司会で、松波（電気第二主任）の開会の辞、阪大松浦教授の発声による乾杯の後、松波が各競技の勝利チームに勝利カップ（年季が入っており、かなり傷んでいます）を授与致しました。続いて勝利監督の喜びの弁、惜しくも敗れたチームの監督の苦い弁解が聞かれました。ビールのおいしさの中で、ゲームを振り返る、あるいは、相手をほめあげるなどのスピーチが自発的に湧きでて、また、恒例の勝利カップ満杯のビールの回し飲みがあちこちで始まり、宴会がすっかり盛り上がりました。主催側は、食べ物とビールだけは不満の出ないようにと、十分の準備で臨みましたので、終了予定時刻まで和気あいあいと過ごし、京大・阪大両電気系教室の友好を深め合うことができました。

最後に、松浦教授のお礼の挨拶があり、小倉教授（電子主任）の閉会の辞をもって懇親会を終え、来年の再会を約して各々帰途につきました。京大側は、再びバスに乗車して午後七時半頃京大時計台前に到着、解散しました。

お天気がよかったこと、ゲームに勝利したこと、食べ物・飲物が十分あったことなどなど、準備を担当しました教室主任としてこの上も無いことでありました。会がスムーズに運んだことは、教職員、学生の懇話会委員の奉仕の賜物であり、ここに感謝の意を表します。また、施設使用の許可から、当日のスポーツ用具などの準備、貸し出しなどにご尽力いただきました関西電力の関係者各位に厚くお礼を申し上げます。なお、特別賞として京都大学の野球、ソフト、テニスの各チームにビール20本ずつを授与致しました。（文責教室主任　松波）

同窓会だより

平成元年関西支部家族見学会

（'89、11、5）

11月5日㈰快晴かつ温暖、絶好の行楽日和のもと、「ルミナス神戸号」は、わが洛友会関西支部一行一四二名を乗せ、神戸港中突堤を、明石海峡クルージングに、出航した。

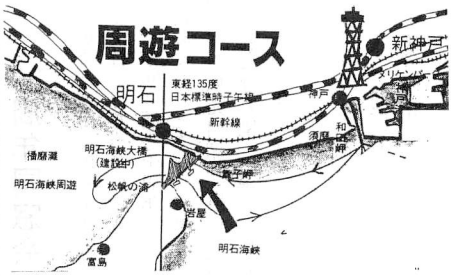
今回の家族見学会は、このクルージングと神戸海洋博物館見学をセットにしたものであるが、特に前半のクルージングは「クルージングとグルメ」と銘打ち、従来のバス移動旅行型即ち分散懇親会型とは異り、レストラン一室を借り切っての全員集合懇親会型である。

神戸港を出港し、しばし海上からの眺めを楽しんだ後、全員ホールに集合し、大嶋支部長よりのご

挨拶、大谷先生より会長代行のご挨拶、松田先生の御近況、電気教室の近況など楽しくお話し頂いたあと、今回の参加最高齢者で米寿をお迎えの荒井さん（大10講卒）の音頭による全員乾杯で立食パーティーにうつった。

全員集合型懇親会であったため、大谷先生、近藤先生を中心に話の花が咲いたり、大先輩との話に興がのっている方々がおられたり、家族ぐるみでの懇談をされている方々がおられ、和やかな、楽しい雰囲気の中で、十分に懇談いただけたようであった。

クルージングの半ば頃より、家族見学会初の試みとして福引き会が行われた。全員興にのり、大盛況で、しばし時の経つのも忘れたようだった。西岸の景色、橋脚間一、九九〇m（南備讃瀬戸大橋の約二倍）で世界最大の吊り橋になると言われる明石海峡大橋の巨大な〝ケーソン〟、行き交うマンモスタンカーや水中翼船、頬を撫ぜる海の風を楽しみつつ船旅を終えた。

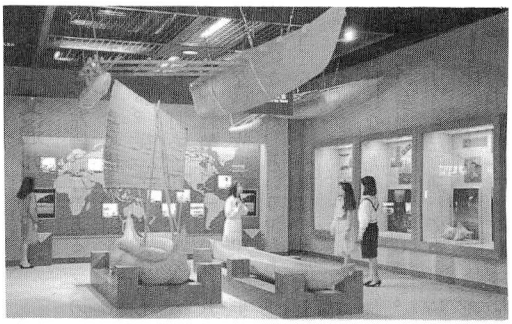


続いての神戸海洋博物館は神戸港開港（明治元年）一二〇周年を記念して作られた「海、船、港」の総合博物館で、美しい帆船模型や、世界の船の解説、「神戸港の昨日・今日・明日」の映像紹介などがあり、大先輩からお子さんまで、興味の度合いに応じて楽しむ事が出来たようだ。

今回は素晴しい天候にめぐまれ、楽しく秋の1日を過ごしていただけたようで、我々世話役もホッと胸をなぎおろし帰途につきました。

（松井記）

青芝会（昭19卒）平成元年大会便り



前回の62年大会は松田、大谷両先生のご出席を得、桂及び修学院離宮の参観の後、伝統の葵祭りを下鴨神社の拝殿で真近に拝観出来、古都での大会に相応しい会合でしたが、今回は東京支部が受持ち、平成元年11月10、11日伊豆で開催しました。参加したのは東京、関西、遠くは九州、四国より夫人8名を含め33名の盛会でした。行事は西伊豆土肥温泉での総会を主に、前後の伊豆大仁カントリークラブでのコンペとバスを貸切っての伊豆半島の遊覧で、秋晴れの二日間を楽しみました。

会場の土肥は今年NHK朝のドラマ「青春家族」で、脚光を浴びた温泉で、宿の玉樟園も七月新築されたばかり、湯量も豊富で露天風呂、サウナと施設も素晴しく久方振りに温泉気分を満喫し、酒を汲み交し、カラオケを楽しみご夫人方の談笑と夜の更けるのを忘れました。

翌日の伊豆遊覧は（平成一・一一・一一）と一の重なる珍らしい日でした。快晴の秋空にクッキリと浮ぶ霊峰富士を背に、堂ケ島洋蘭センター、堂ケ島から波勝島（猿の自然公園）への30分の遊覧船の旅、明治四年建設の石廊崎灯台の荒磯に砕ける白波の勇壮さ、黒船と唐人お吉の下田の了仙寺、天城山第一の名瀑といわれる〝浄蓮の滝〟とワサビ田、源氏と足利由来の修善寺温泉等、を巡り伊豆の風情と陸海の風景を心ゆくまで楽しみました。

次回は平成三年、関西地区での開催と決まりました。（尚青芝会の名称は、電気工学教室の周辺に当時芝生が青々と育ち、休み時間には三三五五芝生に横になり談笑したことから青芝会を名付け、会誌も発行しました）

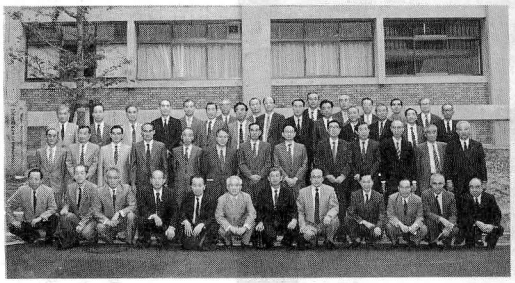
（代長幹事　大嶋幸一
関東支部長　武藤　正　記）

昭和28年卒業生クラス会

昭和28年卒業生は、去る9月30日（土）午後5時より京大会館においてクラス会を開催した。本クラス会は、昭和28年新制大学第一期卒業生、旧制大学最後の卒業生

およびそれらに準じる者合計123名（内物故者4名、居所不明者1名）を母体としており、昨年迄に、卒業20周年を皮切りに25、30周年と3回行われた。本年のクラス会は、卒業35周年に当たる昨昭和63年に開催されるべきものであったが、電気系教室西館が昔懐かしい旧玄関を組み込んで新築されるのを待って行われたものである。

一方、これに先立って4月17日に、28年卒業生は西館前に「公孫樹」を記念植樹した。そこで9月30日当日には、クラス会開催に先立って一階に設けられている「工学部国際交流室」のロビーに集合し、4時半頃植樹の近傍に並んで記念撮影を行った（写真参照）。



次いで、打ち揃って京大会館に移動し、5時よりクラス会を開始した。遠近より50名という多数の級友が出席し、卒業以来久し振りに会ったという者も少なくなく、アルコールが回るにつれて40年も前の学生気分に返り、過去、現在、そして未来を大いに談じて非常に楽しいひとときを過ごし、最後に三高逍遥歌「紅萠ゆる」を合唱して、8時過ぎに別れを惜しみつつ散会した。

（卯本重郎　記）

昭和34年卒業生 30周年同窓会

五年ごとに開催地を関西と関東とで交替に行なっている我が同窓会も、今回は満三十周年を迎えて意義あるものとすべく、場所を宇治川畔の風光明媚な塔の島前の「花やしき浮舟園」に選び、教養部一回生の一年間を過ごした宇治キャンパスや下宿屋のありし面影を偲ぶこととなった。

まず、5月27日(土)、三々五々、電気総合館に集合した一行は改築されたばかりの電気西館の前で、保存された玄関ポーチと銀杏の木を感慨深く眺めたのち、地下に潜った京阪三条駅より乗車、住宅開発のために著しく変貌した宇治線沿線の風景に驚きながら、宇治終点に到着した。宴会場には、当時若手の教官であった近藤文治、池上淳一および桑原道義の三先生（皆、現在は名誉教授）をお招きして、総勢四二名の盛会となった。

翌28日(日)は、ゴルフと宇治構内見学の二手に分かれて、それぞれ有意義な一日を過ごした。

両日ともに絶好の好天気に恵まれたことと、我が34年卒業生の同窓会が常に出席率5割以上を保っていることを、特に記しておきたい。

（10名の幹事団の代弁として、鷹尾和昭記。）

中国雑記 (11)

昭和23年卒　陶坊資

「交通ルール」

日本は、左側通行である。その昔武士は、常に構えて隙を見せてはいけない。従って、歩き乍らも随時に抜き打ち、切り捨てる事が出来る様な態勢を保っていなければならない。故に自然と左側を歩く様になった、という説があるが、本当だろうか。沖縄は、米軍が上陸してジープが右側を走ったので、右側通行になったが、本土復帰後は、元の左側通行に戻っている。

イギリスも左側通行である。騎士も左腰にサーベルを吊っていたので、お互に鞘当てせぬ様に、左側を歩いたのであろうか。しかし、騎士が馬上で両手で槍を使うのであれば、右側の方が都合よいのではないか、又、馬から下りて地上で戦う時も、左手にでかい楯を持ち、右手に剱をとって相手を睨み据えてすれ違うのであれば、やはり、右側の方がよいのではないかとも思える。

他の国々は、イギリスの影響が残っている地域を除いては、殆どが右側通行であるが、その理由は一体何であろうか。

中国は、昔は左側通行であった。恐らく英国の影響であろう。第二次世界大戦の後、日本が降服し、米軍が上陸して大量の車輌が走ったおかげで、交通ルールも右側通行に改正され、今は、鉄道を除き、全国は右側通行で統一されている。

韓国や台湾も、同様に、終戦後、米軍の上陸を機とし、左から右へ、交通ルールが変更されている。香港は、英国の支配下にある為、勿論左側通行である。故に、近き将来、香港が大陸に返還された後は、両者を連絡する高速道路等は、撚・架を必要とするかも知れない。

中国は、解放後、先ずソ連の交通ルールが入って来た。そして赤信号でも、人間様は横断してもよい事になった。人民の国だから、人民優先という理由である。何事が起っても、すべて車輌の責任とされたとの事。その頃私の所属する研究所の運転手が或日、トラックを運転した時、前方に老人を発見して急停車したが、車が古いソ連製でブレーキがすさまじい音をたてた、その為老人が驚いて、ひっくり返り、骨折して了った。運転手は減点となり、この老人の治療費は運転手が払わされる事になった。勿論運転手にそんな金がある筈なく、実際は研究所が代りに払った。中国では、その当時は、人身事故を三度起したら、免許取り上げ、一生運転出来なくなる。即ち運転手に対しては、極めて厳しかった。

私が中国に移住した一九五八年頃は、車が少なく、どの交叉点にも、交通巡査が何人かいて、車が近づいて来ると、ヒョイと信号を点燈する。車が行き過ぎると、消して了う。北京だけでなく、他の大都市でもそうであった。

又、当時の運転方法も大分違っていた。日本では、走行中のエンストは、いけない事となっている。免許の実地試験の最中に、エンストを起せば、直ちに不合格となる。所が中国では、当時は、ワザ〳〵エンストを起させるのだ。バス停に近づくバスは、当然スピードを下げて行くが、最後までクラッチを切らない。だから、ガクンとエンストして停車する事となる。客

の乗降が終んで発車する時になって始めてクラッチを切り、スイッチを入れ、ブルンとエンジンをスタートさせる。即ち、車が停まる度に、エンストであった。

又、走行中の自動車は、ガソリン節約の為と称して、グーッとスピードを上げ切った時、クラッチを切ると同時にスイッチも切って了う。即ち、完全な随性走行である。そしてだん〳〵スピードが落ちて、停まりかゝると、おもむろにスイッチを入れ、ギヤとクラッチを入れる、ガクンとエンジンがかゝる事となる。この動作の繰り返しである。一体どれだけガソリンが節約出来たか知らないが、乗っている者にとっては極めて乗り心地が悪く、一時はこの運転方式がはやったものだった。

前述のソ連式の人間優先の考え方は、車の少ない時代では非常によいのであろうが、車の増えた現代に於て、更に中国元来の法無視の習慣と結びつくと、極めてやっかいである。即ち、今は、どの都市も、人間が溢れ、従って、自転車や自動車も激増し、道路の拡充は、常にそれに追いつかず、それこそニッチもサッチも行かなくなって来ている。盛り場で、あの道路一杯埋め尽す大群衆を見せつけられると、その熱気には、圧倒される。人によっては、恐怖を覚えるのだとの事。その盛場を行く時は、車で人々の尻を、グイ〳〵押し乍ら、群衆をかきわけて前進する事となる。大体中国の民衆は、特に自転車に乗った者共は、車を全然恐れない。車が相当のスピードで走っていても、人々は平気で、車の前に飛び出して来る。しかも決してふり返りもしない。前にも一寸紹介したが、一時流行した、子供らの〝勇敢ごっこ〟――高速で走る車の鼻面を横切り、その車の速度及び車との離隔距離を、お互に比べ合う――の遊びは、法も恐れず、車をも恐れぬ典型的な現象であろう。

夜は特に恐ろしい。月のない夜は、本当に真暗である。郊外は一般に街燈がない。車も、特に必要ない限り、ヘッドライトをつけない。その暗闇の街道を疾駆する車の前方に、いきなり飛び込んで来る自転車や、馬車、トラクター類の実に多い事。あわてゝヘッドライトをつけるが、途端に起る断末魔の悲鳴に似た急ブレーキの音。何度心臓の止まる思いをしたことか。だから中国では、車の助手席や、前方の席に座るのは、精神衛生によくないと云われ、又寿命にもひゞくのではないかと云われている。中国ではとても運転出来ない、と云う人が多いが、その気持はよく分かる気がする。

「交通マナー」

最近は車が俄然増え、渋滞に似た現象が多くなって来た。所が本当に車が多いのであれば、止むを得ないと諦め切れるが、実際は交通マナーが、人についても、車についても、極めて悪く、要らざる混雑を更に助長しているのだ。実例を見てみよう。

先日上海から杭州へ、車で行った。昔は車が少なかったから、大体四時間位で行けたが、今回は八時間以上もかゝって了った。この時の渋滞は、日本の渋滞とは、少々様相が違うのだ。先ずある所で或る車が速度を落したとする。後続の車は忽ちそれを追い越そうとして、前の車の左側へ出る。中国は右側通行であるから、対向車線に出たことになる。所が更に後続の車がぴったりと後に続いて来る。忽ち道路一杯に広がって了う事になる。そして前方からも同様に、道一杯に広がって来る車と、鉢合せになり、そのまゝ睨み合いとなる訳である。

中国人は、喧嘩になっても、手を出さない。だから解決が長くなる。いつまでも、果てしなき口論が続く事となる。どちらかが、根負けするまで、たゞひたすらに、待つより仕方ないのだ。〝今夜は、この路上の車中で、夜を越さねばならないな〟と、何度、覚悟を決めたことか。結局、杭州の宿に着いたのは、深夜の二時過ぎであった。

この様な事は、杭州のみならず、全国至る所で見られる。例えば、広州は、六百万人以上の大都会であるが、郊外には、三車線という道路がある。即ち、片側一・五車線である。道路上には、ちゃんと白い線で車線が明示され、両側の車線内には、夫々の方向の矢印が画かれてある。所が真中の車線には矢印がない。一体どちらへ向って車は走るのか。実際に何度か走って見て分かったことは、この真中の車線は、全く力関係によって、その方向が決まるのだ。一般には、車の数の多い方で決まるらしい。これは、それなりに合理的ではあるが、実際は、運転手の、図々しい方、厚かましい者が勝つとの事。時には、三車線全部が、向うから来る車に占領されて、反対方向に向かう我々は、止むなく歩道を走ったこともあった。

昔、我々の若い頃は、追越をかけて来る車に抜かれまいとして、妨害したり、随分強引な運転をしたものだった。今は、お互に譲り合うのが常識であるが、それはそれだけの社会経験を経て来たからである。中国は未だそこまで行っていない。だから、運転者は、一般に譲る事はしない。譲ったりしたら、何時になったら動けるか、誰にも分からないからだ。譲らぬばかりでなく、グイ〳〵と、車の列に、実に遠慮なく、頭を突込んで来る。図体の大きいトラック等の対向車の目の前を、いきなり左折するのは、日常茶飯事であるので、これも我々乗客にとって、心臓の止まる一瞬となる。しかし、あの無秩序極まる車の混雑する交通情況では、やはり中国式の運転をしなければ、本当に動きがとれなくなるのであろう。だから、中国流の交通マナー（？）も生存競争の結果、自然と生き残ったものなのかも知れない。

もっと〳〵車が増え、夫々の運転者が、お互に譲り合う方が、結果的に速くスムーズに走り得るという事を、身を以って体験して始めて、本当の交通モラルが定着して行くのであろう。

「路上のパイプ」

北京では、支道から主道に出る所に、よく太い鉄パイプが一本、又は二本、路上に横たえてあるのを見かける。事情を知らない者には、不思議に思えるであろう。〝自動車が走るのに、何故この様なものを置くのか〟〝交通妨害ではないか〟〝誰が一体この様なものを置いたのか〟と疑うのが我々の常

識であろう。所が〝処変れば品変る〟で、これは当局が、ワザ〳〵道路にとりつけたものとの事。これがあれば、車が高速で、横町から大通りに走り込むのを防げるのだ。このパイプを高速で越えれば、当然車は猛烈にバウンドする。共振条件が揃えば、それこそ、運転者の頭が、車の天井に、叩きつけられる事となる。故にドライバーは、否応なしに減速せざるを得ないという訳だ。〝支道から本道へ出る時は、スピードを落せ〟と云っても、中々云う事を聞かないので、このパイプを敷く事によって、即ち物理的手段で、交通法規を強制的に守らせる訳である。そして、それは、運転手の習慣になるまで、続けられるのであろうか。たった一本か二本のパイプで、実に安価な簡単な設備で、神聖不可侵の法律の遵守を保証し得るとは、実にうまい考え、さすが中国大陸だなと感心（？）させられる。

所が、場所によっては、あの太いパイプが折れていたり、半分程ふっとんでいたりしているのが、数多く見られる。即ち、知ってか知らずか、相当多くの車が、やはり相当のスピードでぶつかっているという事実である。その驚くべき〝勇敢〟さには、たゞ〝敬服〟するのみである。同時に、パイプは折れたが、運転車の頭は大丈夫だったかなと老婆心も湧く。因みに付言すれば、中国では、シートベルトは、全く使用しない。

そう云えば、日本でも、ガードレールのひん曲がったものを度々見かけるし、この様な所で何でぶつかったりするのだろうと思われる所でも、実際に派手に、標識やガードレールを、すっ飛ばしているのを見ると、中国ばかりでなく、日本でも〝勇敢〟な若者がいるのだなと思わせられる。

「最近の交通規制」

最近は、車が恐ろしく増え、渋滞もひどくなって来た。開放政策に伴ない、外国とも交流し、四つの近代化の精神を生かし、新しい設備や規制を作り出した。例えば、北京の長安街（天安門広場の前の、中国で最も広い大通り）では、高い鉄柵を作り、自転車道と車道を区分した。これで一応自転車と自動車は混ざらなくなったが、人間は相変らず勝手気儘に行動している。ワザ〳〵迂回して横断歩道を渡るのが面倒らしく、あの高さ一メートルもある鉄柵をよじ登って越える人々が、あとを断たない。スカートをひるがえして、颯爽と飛び超える勇敢な女性群、自転車をかついで、柵を乗り越える青年、狭い柵の隙間から、可愛いい頭を入れて、通り抜けを画る子供達…この様な光景は、走る車の窓から、始終見かける事が出来、旅行者の目を結構楽しませてくれる。

車に対する規制も、最近は厳しくなった。クラクションも、やたらに鳴らす事は禁じられ、一分間に何回鳴らすと、いくらの罰金とか云う規制が出来たとの事、故に、昔は、話も出来ない程のクラクション公害も、今は収まり、静かになった。又、左折禁止の地点が、やたらに増えた（中国は、右側通行）。だから、大通りから左に曲がり得る地点が、うんと減り、所によると、十キロメートル先まで行かねば、左折出来なくなって了った。故に、左に曲がる時は、止むを得ず、一旦右へ曲がり、そこで切り返すか、Uターンをしてから、大通りに戻り、それを横断するという事となる。実際は、何台かが、ぞろ〳〵と右の横町へ入り、此処で一斉に廻れ右をする訳だが、一般に、横町は本道より狭く、多くの車が一斉に方向転換するのは、極めてやっかいである。故に運転手は、曲がる時に先ずあたりをよく伺い、警官がいないのを見定めて、サッと左折して了う事となる。

警官の取り締りも、きつくなった。スピード違反は、どん〳〵摑まえて罰金をとっている。但し日本式の〝ねずみ取り〟が少ないので、スピードを証明する事は不可能であり、一般に、絶対に法定速度を越えなかったと云い切れる自信のある運転手もいないのであろうから、警官の判断だけで決まる。この罰金は、その場で支払う。そして領収証はくれない。この罰金の額が、警官の、取り締りの成績となるらしい。だから、交通安全週間となると、至る所でスピード違反の検挙が始まる。話によると、年末のボーナス期に近づくと、警官の臨時収入の源泉として、厳しく取り締まるのだそうだ。という事で、一般に運転手は、警官に対して、物凄い反感を抱いている。

竹村常任幹事逝去

永年の間熱心に洛友会の仕事をされていた竹村常任幹事が去る八月二十五日、洛友会の仕事で京都大学に行かれた時心不全となり入院され加療中でしたが薬石効なく十一月十日逝去されました。心からご冥福をお祈りします。尚本件に関しては次号に掲載します。

（洛友会事務局）

お詫び

平成二・三年用洛友会会員名簿の四六頁と四七頁の索引本文が、当方の手違いで入れ替わっておりましたので読み替えの上ご使用下さい。

（洛友会事務局）

編集後記

明けましておめでとうございます。会員各位におかれましても、ますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて本号は、創刊第一五〇号に当りますので、それを記念して、各位にご寄稿をお願い致しましたところ多数の方々から素晴らしい玉稿を賜り、お陰様で特別記念号を発行する事が出来ました。これひとえにご投稿下された各位のご協力の賜もので心から厚くお礼申し上げます。

名簿発行もようやく終り新年を迎へる事になりました。今後とも会員各位のご協力賜りますよう宣しくお願いします。（山口記）

訃報

講大8　滝埜幾蔵　1・9・3
講大13　藤井好三　1・9・28
昭2　八條健三　1・9・3
講昭7　島田卯一郎　1・9・
講和13　竹村清　1・11・10
昭15　井上大助　1・7・23
昭20　渡辺進　1・10・20

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。